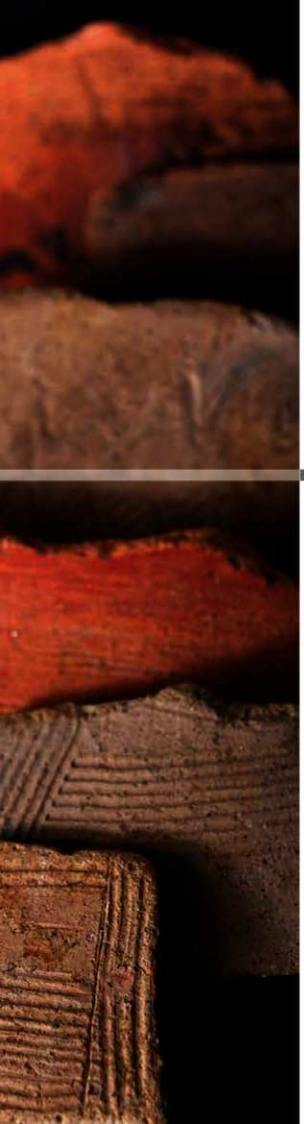
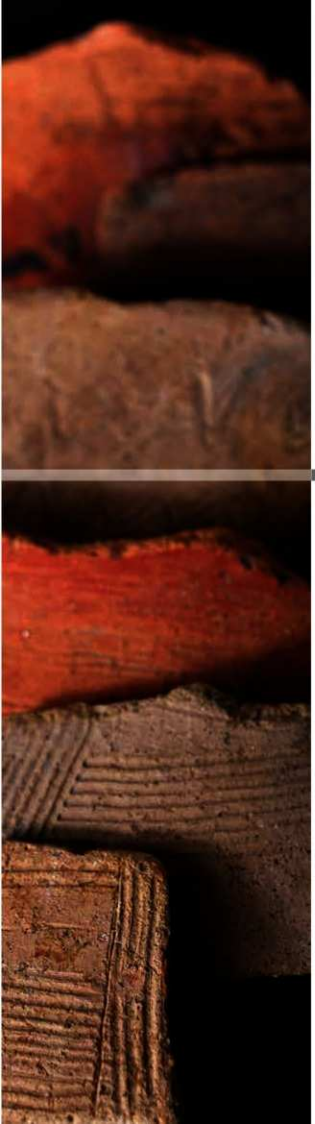


安曇野市の埋蔵文化財第15集

平成28年度
安曇野市埋蔵文化財調査報告書

2018. 3

安曇野市教育委員会



安曇野市の埋蔵文化財第15集

平成28年度
安曇野市埋蔵文化財調査報告書

2018. 3

安曇野市教育委員会

表紙写真　等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査出土弥生土器

裏表紙写真　等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査区鳥瞰（北から）

序

埋蔵文化財は、安曇野市の歴史を理解するためにかけがえのない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査等を通じて、地域の歴史資料の蓄積及び調査結果の公開普及に努めています。

本書では、平成28年度に実施した埋蔵文化財保護事業の成果をまとめました。市内の発掘調査等は全190件であり、試掘調査と重要な発見のあった工事立会を掲載しました。また、小規模な発掘調査を実施した宮脇遺跡第１次発掘調査、等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査及び山城の現状把握のための押野城測量調査も併せて報告しています。

特に、等々力町巾上巾下遺跡の発掘調査では、これまでに安曇野市内で例の少ない弥生時代の建物跡が確認されました。等々力町巾上巾下遺跡は、烏川扇状地の扇端と、穂高川・高瀬川・犀川の合流地点に広がる低湿地帯の中間に位置する遺跡です。この遺跡では、これまでに縄文時代から近世にわたる人々の痕跡が確認されています。今回の調査では、弥生時代と、中世の遺構が新たに発見され、弥生土器や中世の遺物も出土しました。この調査によって、穂高地域の歴史がまたひとつ明らかになったといえます。

末筆となりますが、本書をまとめるにあたり、多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野の歴史・文化の解明に役立つことを祈念し、序とさせていただきます。

平成30年（2018）３月

安曇野市教育委員会
教育長　橋渡　勝也

例　言

1　本書は、長野県安曇野市（ながのけんあづみのし）で平成28年度に実施された埋蔵文化財保護事業の報告書である。

2　押野城測量調査は平成28年度国宝重要文化財等保存整備費補助金制度を利用し、費用の半分の補助を受けて実施した。その他の調査は安曇野市教育委員会が実施し、安曇野市が費用負担した。

3　本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係が行った。執筆は山下泰永、土屋和章、横山幸子が担当したほか、株式会社パレオ・ラボの調査・分析結果を得て山下泰永が統括した。執筆分担は以下の通りである。

山下泰永：第４章１　　土屋和章：第２章４（２）、第５章６

株式会社パレオ・ラボ：第２章５（２）、第５章７　　横山幸子：上記以外

また、作業参加者は以下のとおりである。

佐藤眞弓、田多井智恵、松田洋輔、宮下智美

4　本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。ただし、第２章５（２）、第５章７は文末に掲載した。

5　潮遺跡群浦田遺跡の花粉分析、放射性炭素年代測定及び等々力町巾上巾下遺跡出土炭化材の樹種同定、放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに、押野城測量調査は朝日航洋株式会社に業務委託した。

6　本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。

7　押野城測量調査及び狐城調査では河西克造氏から、潮遺跡群浦田遺跡調査では松田貴子氏からご指導・ご協力をいただいた。

凡　例

1　土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。

2　本書では、平成17年10月１日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「南安曇郡」、「穂高町」のように表記した。

3　文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。

埋蔵文化財センター：埋文センター　　教育委員会：教委

4　等々力町巾上巾下遺跡発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2016）の組み合わせである次の表記を使用した。

等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査：TDR16

5　調査及び本書での遺構名は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき』を参考にし、次の略号を使用している。

SI：竪穴建物跡、竪穴状遺構　　P：ピット

6　土器の記載では、器形について「形土器」の表記を省略した。

7　遺物の法量の表示で、残存箇所のみを計測した場合は括弧で示した。

8　石器石材等の記載では、慣例に従い「黒曜岩」を「黒曜石」と表記した。

目　次

序
例言・凡例
目次・挿図目次・挿表目次・写真目次
第１章　平成28年度埋蔵文化財保護事業 …… 1
第２章　試掘調査等 …… 12
第３章　宮脇遺跡第１次発掘調査 …… 41
第４章　押野城測量調査 …… 47
第５章　等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査 …… 51
引用・参考文献 …… 72
調査報告書抄録

挿図目次

第１図　平成28年度発掘調査等位置図（北部）…… 2
第２図　平成28年度発掘調査等位置図（南部）…… 4
第３図　平成28年度発掘調査等位置図
（穂高駅周辺）…… 6
第４図　平成28年度発掘調査等位置図
（明科駅周辺）…… 7
第５図　潮遺跡群潮神明宮前遺跡試掘位置図 …… 12
第６図　潮遺跡群潮神明宮前遺跡
トレンチ配置図 …… 13
第７図　大坪沢遺跡試掘位置図 …… 14
第８図　大坪沢遺跡トレンチ配置図 …… 15
第９図　藤塚遺跡試掘位置図 …… 16
第10図　藤塚遺跡トレンチ配置図 …… 17
第11図　藤塚遺跡試掘位置図 …… 18
第12図　藤塚遺跡トレンチ配置図 …… 19
第13図　藤塚遺跡土層概念図 …… 19
第14図　藤塚遺跡出土土器 …… 20
第15図　潮遺跡群浦田遺跡試掘位置図 …… 22
第16図　潮遺跡群浦田遺跡トレンチ配置図 …… 23
第17図　潮遺跡群浦田遺跡土層概念図 …… 23
第18図　Ｅトレンチ第３層検出図 …… 24
第19図　水洗後の残渣 …… 25
第20図　産出した花粉化石 …… 27
第21図　暦年較正結果 …… 30
第22図　草深遺跡立会位置図 …… 31
第23図　草深遺跡土層概念図 …… 31
第24図　明科遺跡群上郷遺跡立会位置図 …… 32
第25図　明科遺跡群上郷遺跡土層概念図 …… 32
第26図　明科遺跡群栄町遺跡立会位置図 …… 33
第27図　明科遺跡群栄町遺跡土層概念図 …… 33
第28図　明科遺跡群栄町遺跡掘削箇所 …… 34
第29図　上手屋敷遺跡立会位置図 …… 35
第30図　上手屋敷遺跡土層概念図 …… 35
第31図　狐城立会位置図 …… 36
第32図　追堀遺跡立会位置図 …… 38
第33図　追堀遺跡土層概念図 …… 38
第34図　工事立会出土土器 …… 39
第35図　工事立会出土石器 …… 39

第36図　宮脇遺跡位置図 …… 42
第37図　宮脇遺跡調査区配置図 …… 43
第38図　宮脇遺跡土層概念図 …… 44
第39図　押野城位置図 …… 47
第40図　押野城出土石器 …… 48
第41図　押野城工事施工範囲図 …… 49
第42図　等々力町巾上巾下遺跡位置図 …… 54
第43図　等々力町巾上巾下遺跡調査区位置図 …… 55
第44図　等々力町巾上巾下遺跡土層概念図 …… 57
第45図　A区 SI 1 …… 59
第46図　C区 SI 2 …… 59
第47図　等々力町巾上巾下遺跡出土土器 …… 61
第48図　等々力町巾上巾下遺跡出土炭化材の
走査型電子顕微鏡写真と試料写真 …… 64
第49図　暦年較正結果 …… 66
第50図　等々力町巾上巾下遺跡既出石包丁 …… 67

挿表目次

第１表　平成28年度発掘調査等一覧 …… 8
第２表　藤塚遺跡出土土器観察表 …… 21
第３表　産出花粉胞子一覧 …… 26
第４表　測定試料及び処理 …… 28
第５表　放射性炭素年代測定及び
暦年較正の結果 …… 29
第６表　宮脇遺跡付近の遺跡 …… 42
第７表　等々力町巾上巾下遺跡発掘調査等記録 … 54
第８表　等々力町巾上巾下遺跡付近の遺跡 …… 54
第９表　等々力町巾上巾下遺跡出土土器観察表 … 62
第10表　測定試料及び処理 …… 65
第11表　放射性炭素年代測定及び
暦年較正の結果 …… 65

写真目次

写真１　試掘　潮遺跡群潮神明宮前遺跡 …… 13
写真２　試掘　大坪沢遺跡 …… 15
写真３　試掘　藤塚遺跡 …… 17
写真４　試掘　藤塚遺跡 …… 20
写真５　藤塚遺跡出土土器 …… 20
写真６　試掘　潮遺跡群浦田遺跡 …… 24
写真７　工事立会　明科遺跡群栄町遺跡 …… 34
写真８　工事立会　狐城 …… 37
写真９　工事立会出土土器 …… 40
写真10　工事立会出土石器 …… 40
写真11　宮脇遺跡第１次発掘調査 …… 46
写真12　押野城測量調査 …… 50
写真13　等々力町巾上巾下遺跡
第２次発掘調査１ …… 69
写真14　等々力町巾上巾下遺跡
第２次発掘調査２ …… 70
写真15　等々力町巾上巾下遺跡出土土器 …… 71

第１章　平成28年度埋蔵文化財保護事業

１　埋蔵文化財保護事業の概要

⑴　事務局の体制

平成28年度の安曇野市における埋蔵文化財保護事業は、安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係が担当した。体制は次のとおりである。

事務局　安曇野市教育委員会教育部　文化課

那須野雅好（文化課長）、山下泰永（文化課課長補佐兼文化財保護係長）

土屋和章、横山幸子、佐藤眞弓（以上、文化財保護係）

⑵　地理的環境と遺跡の立地

安曇野市は平成17年（2005）10月１日に豊科町、穂高町、三郷村、堀金村、明科町の５町村が合併して誕生した市で、長野県のほぼ中央部に位置し、北は大町市、松川村、池田町、生坂村、筑北村、南は松本市に隣接する。地形的には松本盆地の中ほどにあり、西は飛騨山脈、東は筑摩山地に囲まれる。松本盆地は、縁辺部から流れる複数の河川が運搬した堆積物により形成されている。

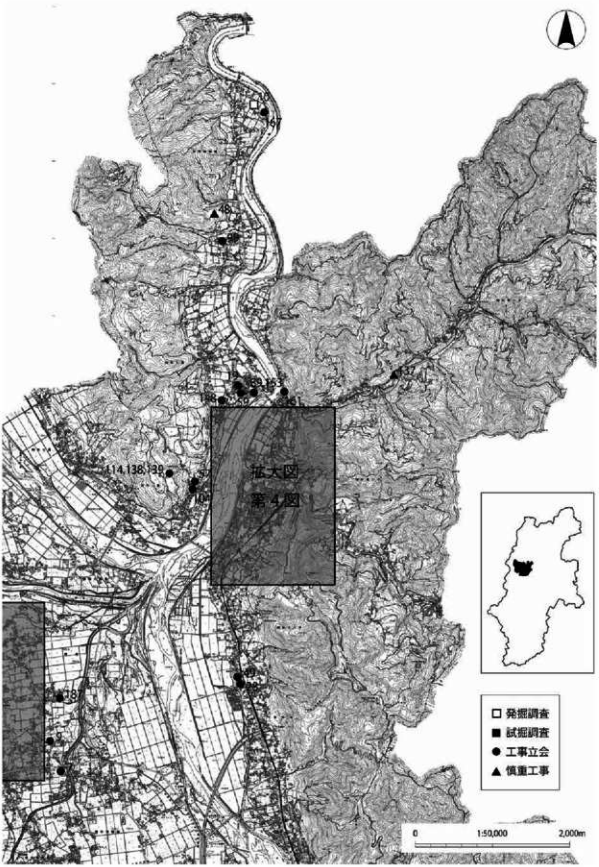
安曇野市内に所在する遺跡は、現在およそ400箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、確認されている時代としては縄文時代早期から現代に至る。縄文時代の遺跡は、主として北アルプス山麓の扇状地扇頂付近及び犀川以東の河岸段丘上に多く立地しており、過去の調査からは縄文時代中期に隆盛を極めたことがわかる。弥生時代になると遺跡数は減少し、集落の立地も扇状地扇央及び扇端へ移る。生業形態の変化が遺跡立地の変化に影響している可能性があり、この集落立地は基本的に現代まで踏襲されている。安曇野市では、前・中期の古墳は現在までに確認されておらず、後期の群集墳が北アルプス山麓や明科地域に分布する。奈良時代以降は、前代までの立地を踏襲するように犀川以西の扇端と犀川以東の河岸段丘上に集落が営まれるなか、明科地域では明科廃寺と呼ばれる古代寺院の存在が確認されている。また、豊科田沢の山間部一帯から隣接する松本市域にかけて須恵器窯群が築かれている。

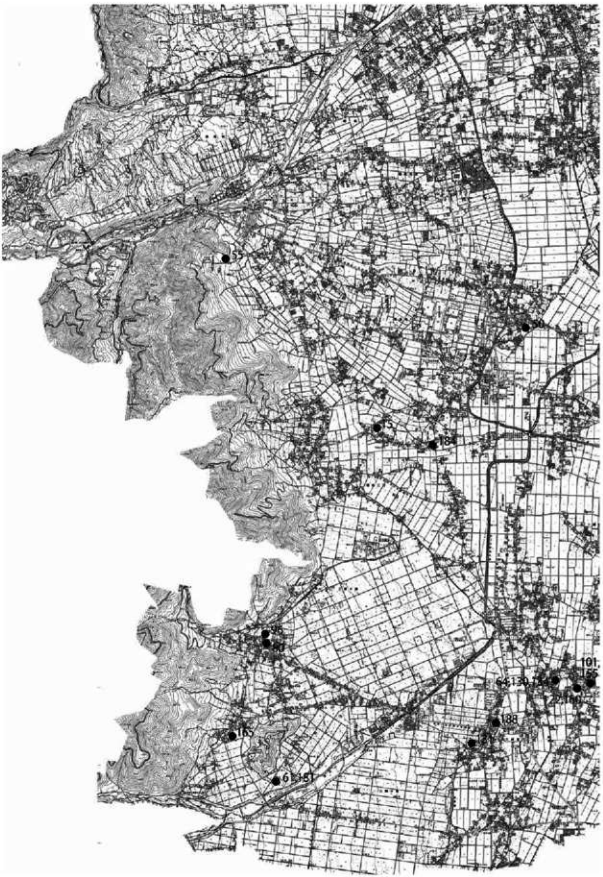
⑶　平成28年度の概要

平成28年度の安曇野市における発掘調査等の一覧は第１表のとおりで全190件であった。このうち安曇野市教育委員会が主体となって実施した発掘調査等は合計189件で、内訳は発掘調査４件、試掘５件、工事立会162件、慎重工事18件となっている。それぞれの位置は、第１～４図に示す。試掘調査の概要は次章で取り上げた。

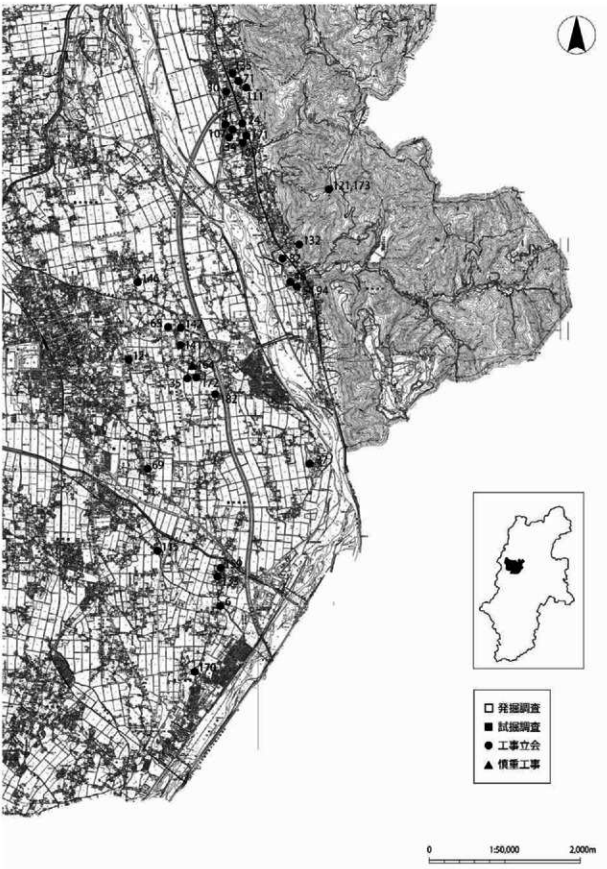
また、安曇野市教育委員会が調査主体となった埋蔵文化財保護事業の他に、國學院大學文学部考古学研究室によって穂高古墳群Ｆ９号墳の学術発掘が実施されている。

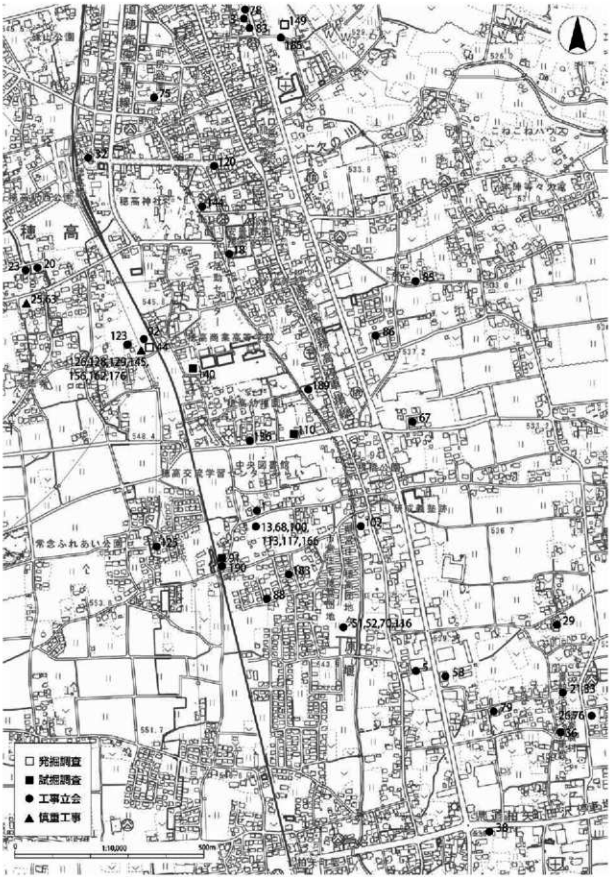
第１図　平成28年度発掘調査等位置図（北部）


拡大図
第４図
□ 発掘調査
■ 試掘調査
● 工事立会
▲ 慎重工事
0
1:50,000
2,000m

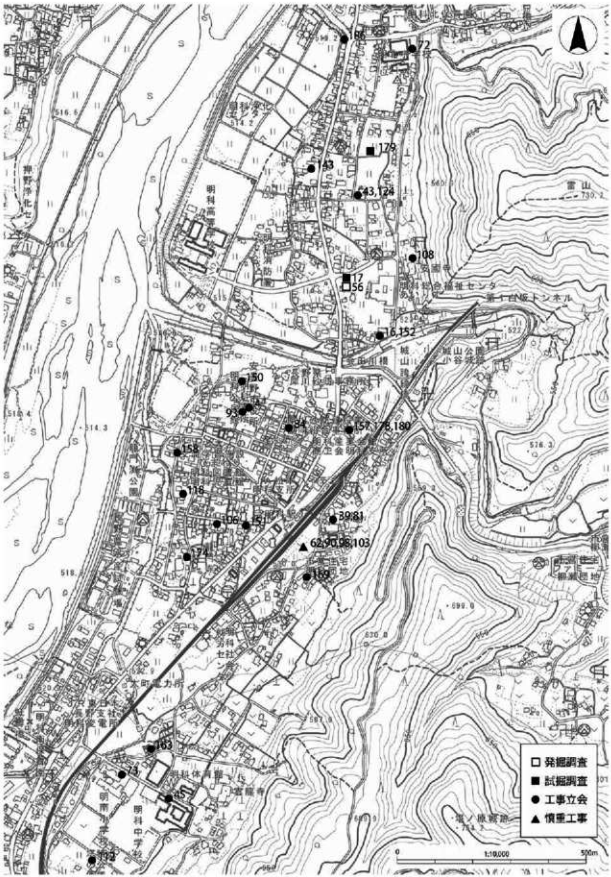


第２図　平成28年度発掘調査等位置図（南部）


□ 発掘調査
■ 試掘調査
● 工事立会
▲ 慎重工事
0
1:50,000
2,000m



第３図　平成28年度発掘調査等位置図（穂高駅周辺）



第４図　平成28年度発掘調査等位置図（明科駅周辺）

第１表　平成28年度発掘調査等一覧

No.	調査	遺跡	所在地	工事目的等	調査日 _ 自	調査日 _ 至	調査主体
●1	工事立会	藤塚遺跡	穂高6756番５	個人住宅	20160405	20160405	市教委
●2	工事立会	等々力町巾上中下遺跡	穂高4372番１先外	道路	20160405	20160405	市教委
●3	工事立会	等々力町巾上中下遺跡	穂高4582番１外５筆	その他の建物	20160406	20160406	市教委
●4	工事立会	明科遺跡群柴町遺跡	明科中川手6824番６	個人住宅	20160408	20160408	市教委
●5	工事立会	八ツ口遺跡	穂高1376番１先外	道路	20160408	20160408	市教委
●6	工事立会	飯田勢跡	豊科高家293番外１筆	その他開発	20160410	20160410	市教委
●7	工事立会	馬場街道遺跡	穂高737番９外３筆	宅地造成	20160411	20160411	市教委
●8	工事立会	等々力町巾上中下遺跡	穂高4749番１先外	道路	20160413	20160413	市教委
●9	工事立会	矢原宮地遺跡	穂高1099番１	個人住宅	20160418	20160418	市教委
□10	発掘調査	ほうろく屋敷遺跡	明科南陟郷3192番	個人住宅	20160322	20160419	市教委
●11	工事立会	宮城遺跡	穂高有明7035番１	個人住宅	20160420	20160420	市教委
●12	工事立会	蛯ヶ池遺跡ほか	豊科4221番４付近	ガス・水道・電気等	20160422	20160422	市教委
●13	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1699番１外４筆	宅地造成	20160421	20160426	市教委
●14	工事立会	山崎遺跡	穂高牧1849番３	個人住宅	20160427	20160427	市教委
●15	工事立会	なかじま遺跡	堀金三田1289番18付近	ガス・水道・電気等	20160509	20160509	市教委
●16	工事立会	潮遺跡群潮神明宮前遺跡	明科東川手587番３	個人住宅	20160509	20160509	市教委
■17	試掘	潮遺跡群潮神明宮前遺跡	明科東川手532番２	その他開発	20160512	20160512	市教委
●18	工事立会	穂高神社境内遺跡	穂高6657番２	ガス・水道・電気等	20160516	20160516	市教委
●19	工事立会	みどりヶ丘遺跡	明科七貴7222番47	個人住宅	20160418	20160517	市教委
●20	工事立会	宮脇遺跡	穂高10105番２	個人住宅	20160519	20160519	市教委
●21	工事立会	矢原宮地遺跡	穂高1044番１	宅地造成	20160523	20160524	市教委
●22	工事立会	宮城遺跡	穂高有明7040番２	個人住宅	20160525	20160525	市教委
●23	工事立会	宮脇遺跡	穂高10105番３	個人住宅	20160530	20160530	市教委
●24	工事立会	光遺跡群中条遺跡	明科光635番１	その他開発	20160601	20160601	市教委
▲25	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6486番５外１筆	個人住宅	20160601	20160601	市教委
●26	工事立会	矢原宮地遺跡	穂高1052番１外２筆	宅地造成	20160523	20160603	市教委
●27	工事立会	神谷遺跡	穂高牧1372番	個人住宅	20160606	20160606	市教委
●28	工事立会	給然寺古屋敷遺跡	明科中川手181番14	個人住宅	20160607	20160607	市教委
●29	工事立会	八ツ口遺跡	穂高1410番２	個人住宅	20160607	20160607	市教委
●30	工事立会	光遺跡群北村遺跡	明科光185番１外５筆	宅地造成	20160610	20160610	市教委
▲31	慎重工事	貝梅辺下遺跡	穂高5009番24	その他の建物	20160620	20160620	市教委
●32	工事立会	穂高神社境内遺跡	穂高5949番２付近	道路	20160622	20160622	市教委
●33	工事立会	矢原宮地遺跡	穂高1044番１の内	個人住宅	20160624	20160624	市教委
●34	工事立会	光遺跡群中条遺跡	明科光847番外５筆	その他の建物	20160608	20160627	市教委
●35	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高294番16	個人住宅	20160629	20160629	市教委
●36	工事立会	矢原五輪須遺跡	穂高1038番１	宅地造成	20160523	20160630	市教委
●37	工事立会	熊倉遺跡	豊科高家2420番４	道路	20160701	20160701	市教委
●38	工事立会	中在地遺跡	穂高781番１	集合住宅	20160701	20160701	市教委
●39	工事立会	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手3650番１外８筆	その他の建物	20160707	20160707	市教委
●40	工事立会	新林遺跡	穂高牧1898番４先外	その他開発	20160711	20160711	市教委
●41	工事立会	光遺跡群北村遺跡	明科光570番１	個人住宅	20160711	20160711	市教委
●42	工事立会	芝宮南遺跡	穂高7217番１	その他の建物	20160711	20160711	市教委
●43	工事立会	潮遺跡群浦田遺跡	明科東川手714番１	個人住宅	20160714	20160714	市教委
□44	発掘調査	宮脇遺跡（穂高高校北遺跡）※1	穂高6616番外３筆	宅地造成	20160715	20160715	市教委
●45	工事立会	上手屋敷遺跡	明科中川手2659番１	ガス・水道・電気等	20160718	20160718	市教委
●46	工事立会	小瀬堀遺跡	豊科田沢4823番３外２筆	個人住宅	20160719	20160719	市教委
●47	工事立会	草深遺跡	穂高牧854番先外	その他開発	20160720	20160720	市教委

No.	調査	遺跡	所在地	工事目的等	調査日_自	調査日_至	調査主体
▲48	慎重工事	神谷物見跡	明科南陸奥5600番35外59筆	土砂採取	20160720	20160720	市教委
●49	工事立会	給然寺古屋敷遺跡	明科中川手112番５外１筆	個人住宅	20160721	20160721	市教委
●50	工事立会	下堀遺南遺跡	堀金烏川4888番１	個人住宅	20160725	20160725	市教委
●51	工事立会	ハツ口遺跡	穂高柏原1660番４外３筆	個人住宅	20160726	20160726	市教委
●52	工事立会	ハツ口遺跡	穂高柏原1664番５	個人住宅	20160728	20160728	市教委
●53	工事立会	穂高古墳群Ｂ８号墳ほか	穂高有明2191番33外	道路	20160728	20160728	市教委
●54	工事立会	小瀬幅遺跡	豊科田沢4869番１	個人住宅	20160729	20160729	市教委
●55	工事立会	上ノ山窯跡群ほか（大同寺跡）[92]	豊科田沢8141番473外	その他開発	20160729	20160729	市教委
□56	発掘調査	潮道跡群潮神明宮前遺跡	明科東川手532番２	その他の建物	20160601	20160801	市教委
●57	工事立会	上野遺跡	明科七貴6267番２先外	道路	20160624	20160802	市教委
●58	工事立会	ハツ口遺跡	穂高1377番１外３筆	店舗	20160802	20160802	市教委
●59	工事立会	みどりヶ丘遺跡	明科七貴7222番13	個人住宅	20160802	20160802	市教委
●60	工事立会	草深遺跡	穂高牧1550番の一部	その他の建物	20160803	20160803	市教委
●61	工事立会	南松原遺跡	三郷小倉6412番１外３筆	その他の建物	20160804	20160804	市教委
▲62	慎重工事	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手3660番２	個人住宅	20160804	20160804	市教委
▲63	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6486番８外１筆	個人住宅	20160809	20160809	市教委
●64	工事立会	坂がいと遺跡	三郷明盛4956番１外６筆	宅地造成	20160803	20160812	市教委
●65	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高99番３	個人住宅	20160817	20160817	市教委
●66	工事立会	山崎遺跡	穂高牧1767番11先外	その他開発	20160818	20160818	市教委
●67	工事立会	藤塚遺跡	穂高2455番２の一部	個人住宅	20160818	20160818	市教委
●68	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1699番８	個人住宅	20160818	20160818	市教委
●69	工事立会	吉野町遺跡	豊科3003番２	宅地造成	20160819	20160819	市教委
●70	工事立会	ハツ口遺跡	穂高柏原1664番６外３筆	個人住宅	20160822	20160822	市教委
●71	工事立会	光道跡群北村遺跡	明科光264番１	個人住宅	20160823	20160823	市教委
●72	工事立会	潮道跡群塩田若宮遺跡	明科東川手823番	ガス・水道・電気等	20160824	20160824	市教委
●73	工事立会	上手屋敷遺跡	明科中川手2694番１	ガス・水道・電気等	20160824	20160824	市教委
●74	工事立会	等々力町巾上巾下遺跡	穂高4511番２外２筆	その他開発	20160824	20160824	市教委
●75	工事立会	穂高神社境内遺跡	穂高6002番６外１筆	個人住宅	20160825	20160825	市教委
●76	工事立会	矢原宮地遺跡	穂高1052番７	個人住宅	20160831	20160831	市教委
□77	発掘調査	穂高古墳群Ｆ９号墳	穂高柏原3653番	学術研究	20160823	20160901	國學院大學
●78	工事立会	等々力町巾上巾下遺跡	穂高4585番１	その他開発	20160901	20160901	市教委
●79	工事立会	矢原権現池遺跡	穂高1019番１	個人住宅	20160906	20160906	市教委
●80	工事立会	五反田遺跡	三郷小倉535番１の内	個人住宅	20160909	20160909	市教委
●81	工事立会	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手3650番１外８筆	その他の建物	20160902	20160909	市教委
●82	工事立会	町田遺跡	豊科田沢4702番４先外	その他開発	20160913	20160913	市教委
●83	工事立会	等々力町巾上巾下遺跡	穂高4597番１外６筆	道路	20160916	20160916	市教委
●84	工事立会	明科遺跡群栄町遺跡	明科中川手6824番73外１筆	その他開発	20160916	20160916	市教委
●85	工事立会	北才の神遺跡	穂高2771番１	個人住宅	20160926	20160926	市教委
●86	工事立会	北才の神遺跡	穂高2494番22	個人住宅	20160926	20160926	市教委
●87	工事立会	等々力町巾上巾下遺跡	穂高4508番５外７筆	ガス・水道・電気等	20160926	20160926	市教委
●88	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1676番８	個人住宅	20160927	20160927	市教委
●89	工事立会	狐城	明科七貴7222番１	その他開発	20160930	20160930	市教委
▲90	慎重工事	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手3664番６	個人住宅	20161004	20161004	市教委
■91	試掘	大坪沢遺跡	穂高柏原1705番１	集合住宅	20161007	20161007	市教委
●92	工事立会	宮脇遺跡（穂高高校北遺跡）[91]	穂高6616番外３筆	宅地造成	20161011	20161011	市教委
●93	工事立会	明科遺跡群栄町遺跡	明科中川手6824番６の一部	その他の建物	20161012	20161012	市教委
●94	工事立会	小瀬幅遺跡	豊科田沢4869番１先外３筆	ガス・水道・電気等	20161012	20161012	市教委
●95	工事立会	新林遺跡	穂高牧504番10外１筆	個人住宅	20161014	20161014	市教委

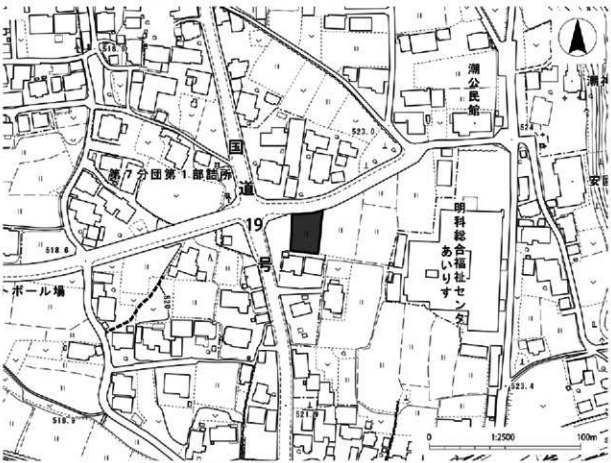
No.	調査	遺跡	所在地	工事目的等	調査日 _ 自	調査日 _ 至	調査主体
●96	工事立会	五反田遺跡	三郷小倉192番１	その他の建物	20161018	20161018	市教委
●97	工事立会	芝宮南遺跡	穂高7228番先外	道路	20161020	20161020	市教委
▲98	慎重工事	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手3664番８	個人住宅	20161021	20161021	市教委
●99	工事立会	中村殿田遺跡	明科南陸郷890番１外１筆	その他の建物	20161024	20161024	市教委
●100	工事立会	迫堀遺跡	穂高柏原1699番５	個人住宅	20161024	20161024	市教委
●101	工事立会	三桂神社東遺跡	三郷明盛4810番１外	その他の建物	20160909	20161025	市教委
●102	工事立会	三枚橋遺跡	穂高柏原975番１外	その他の建物	20161025	20161025	市教委
▲103	慎重工事	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手3660番11外１筆	個人住宅	20161028	20161028	市教委
●104	工事立会	上野遺跡	明科七貴6268番２	その他開発	20161031	20161031	市教委
●105	工事立会	寺島畑遺跡	穂高牧1490番６	ガス・水道・電気等	20161031	20161031	市教委
●106	工事立会	明科遺跡群明科廃寺	明科中川手3806番３	ガス・水道・電気等	20161031	20161031	市教委
●107	工事立会	光遺跡群中条遺跡	明科光600番４	その他開発	20161101	20161101	市教委
●108	工事立会	潮遺跡群新屋遺跡	明科東川手914番	その他の建物	20161101	20161101	市教委
●109	工事立会	光遺跡群中条遺跡	明科光789番１	その他の建物	20161101	20161101	市教委
■110	試掘	藤塚遺跡	穂高6801番１外４筆	その他開発	20161102	20161102	市教委
●111	工事立会	光遺跡群北村遺跡	明科光291番１外２筆	個人住宅	20161104	20161104	市教委
●112	工事立会	上手屋敷遺跡	明科中川手2234番２	個人住宅	20161018	20161104	市教委
●113	工事立会	迫堀遺跡	穂高柏原1699番９	個人住宅	20161107	20161107	市教委
●114	工事立会	押野城	明科七貴6456番３外	道路	20161109	20161109	市教委
●115	工事立会	日光寺跡	豊科1355番１外１筆	宅地造成	20161110	20161110	市教委
●116	工事立会	八ツ口遺跡	穂高柏原1664番６外３筆	その他開発	20161110	20161110	市教委
●117	工事立会	迫堀遺跡	穂高柏原1699番６	個人住宅	20161110	20161110	市教委
●118	工事立会	明科遺跡群本町遺跡	明科中川手3838番２	個人住宅	20161111	20161111	市教委
●119	工事立会	草深遺跡	穂高牧1551番２	個人住宅	20161114	20161115	市教委
●120	工事立会	穂高神社境内遺跡	穂高6015番16外	その他開発	20161117	20161117	市教委
●121	工事立会	光城跡	豊科田沢7294番396	その他開発	20161121	20161121	市教委
●122	工事立会	三桂神社東遺跡	三郷明盛4876番14外４筆	道路	20161122	20161122	市教委
●123	工事立会	宮脇遺跡	穂高6615番１外２筆	個人住宅	20161122	20161122	市教委
●124	工事立会	潮遺跡群浦田遺跡	明科東川手715番	ガス・水道・電気等	20161125	20161125	市教委
●125	工事立会	大坪沢遺跡	穂高柏原1828番12	その他開発	20161125	20161125	市教委
▲126	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6616番３	個人住宅	20161129	20161129	市教委
●127	工事立会	新林遺跡	穂高牧1973番４先	道路	20161130	20161130	市教委
▲128	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6619番９	個人住宅	20161130	20161130	市教委
▲129	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6616番４	個人住宅	20161130	20161130	市教委
●130	工事立会	坂がいと遺跡	三郷明盛4956番８	個人住宅	20161201	20161201	市教委
●131	工事立会	堂原遺跡	三郷温4198番８	農業基盤整備事業	20161202	20161202	市教委
●132	工事立会	町田遺跡	豊科田沢4674番外５筆	その他開発	20141215	20161205	市教委
●133	工事立会	宮前遺跡	豊科高家745番２外１筆	個人住宅	20161114	20161205	市教委
●134	工事立会	坂がいと遺跡	三郷明盛4965番１外１筆	個人住宅	20161206	20161206	市教委
●135	工事立会	光遺跡群北村遺跡	明科光85番１	個人住宅	20161118	20161209	市教委
●136	工事立会	藤塚遺跡	穂高6797番22	個人住宅	20161209	20161209	市教委
▲137	慎重工事	土橋遺跡	明科東川手3292番１外	道路	20161212	20161212	市教委
●138	工事立会	城ヶ平遺跡	明科七貴6707番10外	道路	20161214	20161214	市教委
●139	工事立会	押野山遺跡	明科七貴6707番６外	道路	20161214	20161214	市教委
■140	試掘	藤塚遺跡	穂高6823番３外１筆	宅地造成	20161220	20161220	市教委
●141	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高149番５先	道路	20161220	20161220	市教委
●142	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高138番１	ガス・水道・電気等	20161221	20161221	市教委
●143	工事立会	潮遺跡群浦田遺跡	明科東川手405番３	その他の建物	20161222	20161222	市教委
●144	工事立会	穂高神社境内遺跡	穂高6073番１外１筆	ガス・水道・電気等	20161226	20161226	市教委
▲145	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6616番６	個人住宅	20170104	20170104	市教委

No.	調査	遺跡	所在地	工事目的等	調査日＿自	調査日＿至	調査主体
●146	工事立会	原村遺跡	豊科南穂高6863番１外３筆	宅地造成	20170111	20170111	市教委
●147	工事立会	宮脇遺跡	穂高6148番外６筆	宅地造成	20170112	20170112	市教委
●148	工事立会	塩川原遺跡	明科七貴7405番	ガス・水道・電気等	20170117	20170117	市教委
□149	発掘調査	等々力町中上中下遺跡	穂高4576番外４筆	その他開発	20161226	20170118	市教委
●150	工事立会	明科遺跡群栄町遺跡	明科中川手4249番18	ガス・水道・電気等	20170120	20170120	市教委
●151	工事立会	明科遺跡群県町遺跡	明科中川手3762番５外１筆	ガス・水道・電気等	20161119	20170123	市教委
●152	工事立会	潮遺跡群瀬神明宮前遺跡	明科東川手587番	ガス・水道・電気等	20170123	20170123	市教委
●153	工事立会	狐城	明科七貴7222番58	その他開発	20170125	20170125	市教委
●154	工事立会	上ノ山窯跡群ほかショウノヒナタ遺跡群※1	豊科田沢8141番473外	その他開発	20170131	20170131	市教委
●155	工事立会	三柱神社東遺跡	三郷明盛4810番１外	その他の建物	20170124	20170131	市教委
▲156	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6616番10	個人住宅	20170131	20170131	市教委
●157	工事立会	明科遺跡群栄町遺跡	明科中川手4164番１外11筆	その他開発	20170201	20170201	市教委
●158	工事立会	明科遺跡群本町遺跡ほか	明科中川手3859番１先外	ガス・水道・電気等	20170117	20170201	市教委
●159	工事立会	宮前遺跡	豊科高家679番１	農業基盤整備事業	20170208	20170208	市教委
●160	工事立会	三柱神社東遺跡	三郷明盛4712番９	ガス・水道・電気等	20170213	20170213	市教委
●161	工事立会	水戸橋ノ爪遺跡	明科東川手13368番２付近	その他の建物	20170214	20170214	市教委
▲162	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6616番５	個人住宅	20170214	20170214	市教委
●163	工事立会	上手屋敷遺跡	明科中川手2648番	その他開発	20170215	20170215	市教委
▲164	慎重工事	上手木戸遺跡	豊科南穂高165番４	農業基盤整備事業	20170215	20170215	市教委
●165	工事立会	中沢遺跡	三郷小倉1588番１	公園造成	20170216	20170216	市教委
●166	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1699番11外１筆	個人住宅	20170216	20170216	市教委
●167	工事立会	ほうろく屋敷遺跡	明科南陸郷3220番３	農業基盤整備事業	20170217	20170217	市教委
●168	工事立会	松尾遺跡	穂高有明7325番２	その他開発	20170221	20170221	市教委
●169	工事立会	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手3610番１	その他の建物	20170221	20170221	市教委
●170	工事立会	飯田古宮遺跡	豊科高家185番１	その他開発	20170222	20170222	市教委
●171	工事立会	光遺跡群中条遺跡	明科光771番５	その他開発	20170227	20170227	市教委
●172	工事立会	上手木戸遺跡	豊科南穂高236番21先	ガス・水道・電気等	20170227	20170227	市教委
●173	工事立会	光城跡	豊科田沢7294番396	その他開発	20170228	20170228	市教委
●174	工事立会	明科遺跡群県町遺跡	明科中川手3506番４	個人住宅	20170228	20170228	市教委
▲175	慎重工事	神谷遺跡	穂高牧931番３先外	道路	20170301	20170301	市教委
▲176	慎重工事	宮脇遺跡	穂高6616番７	個人住宅	20170302	20170302	市教委
●177	工事立会	小岩銀下木戸遺跡	穂高有明3117番３	個人住宅	20170303	20170303	市教委
●178	工事立会	明科遺跡群栄町遺跡	明科中川手4161番１	宅地造成	20170224	20170306	市教委
■179	試掘	潮遺跡群浦田遺跡	明科東川手722番１外４筆	土地区画整理	20170307	20170308	市教委
●180	工事立会	明科遺跡群栄町遺跡	明科中川手4175番１	ガス・水道・電気等	20170311	20170311	市教委
●181	工事立会	南松原遺跡	三郷小倉6412番１外３筆	その他の建物	20170313	20170313	市教委
●182	工事立会	上手木戸遺跡	豊科高家3925番２外１筆	その他開発	20170313	20170313	市教委
●183	工事立会	追堀遺跡	穂高柏原1675番９外３筆	宅地造成、その他開発	20170310	20170315	市教委
●184	工事立会	堀の内遺跡	堀金三田1053番５	その他開発	20170321	20170321	市教委
●185	工事立会	等々力町中上中下遺跡	穂高4606番１先	道路	20170324	20170324	市教委
●186	工事立会	潮遺跡群塩田若宮遺跡	明科東川手859番５	その他開発	20170324	20170324	市教委
●187	工事立会	矢原中上遺跡	穂高2035番	その他開発	20170327	20170327	市教委
●188	工事立会	上総屋敷遺跡	三郷温4326番２	その他開発	20170328	20170328	市教委
●189	工事立会	藤塚遺跡	穂高6716番外１筆	その他開発	20170329	20170329	市教委
●190	工事立会	大坪沢遺跡	穂高柏原1705番１	集合住宅	20170331	20170331	市教委

※１　遺跡分布の見直しにより、穂高高校北遺跡から宮脇遺跡へ名称が変更となった。
※２　広範囲で実施される松くい被害木の燻蒸の立会のため、複数遺跡で工事立会を実施した。

第２章　試掘調査等

１　試掘　潮（うしお）遺跡群潮神明宮前（うしおしんめいぐうまえ）遺跡（第１表■17）



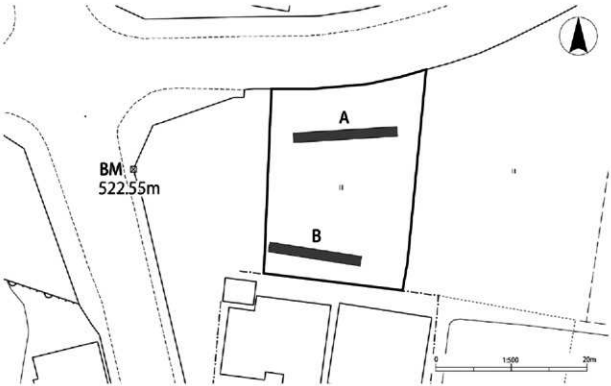
第５図　潮遺跡群潮神明宮前遺跡試掘位置図

所　在　地	安曇野市明科東川手532番２
調 査 期 間	平成28年（2016）５月12日
調 査 面 積	26m^2
調 査 契 機	その他開発（消防施設）

(1)　概要

潮遺跡群潮神明宮前遺跡は、犀川右岸の河岸段丘上に所在する古代の集落跡である。この遺跡では、現在までに２回の発掘調査が実施され、平安時代の集落及び古墳時代後期の古墳群の一部が調査された（明科町教委2005）。

今回の調査では、消防施設建設に先立ち調査地に２箇所の試掘トレンチ（A～B）を設定し、土層及び遺構・遺物の検出を試みた。調査の結果、Ａトレンチから２箇所の竪穴建物跡とみられる平面形及び土器類、Ｂトレンチからも土器類が出土した。このため、調査地では遺構が良好に残存していることを確認できた。本件工事については、開発事業者と協議を継続し、平成28年度に発掘調査を実施した。



第６図　潮遺跡群潮神明宮前遺跡トレンチ配置図

調査地遠景（北東から）

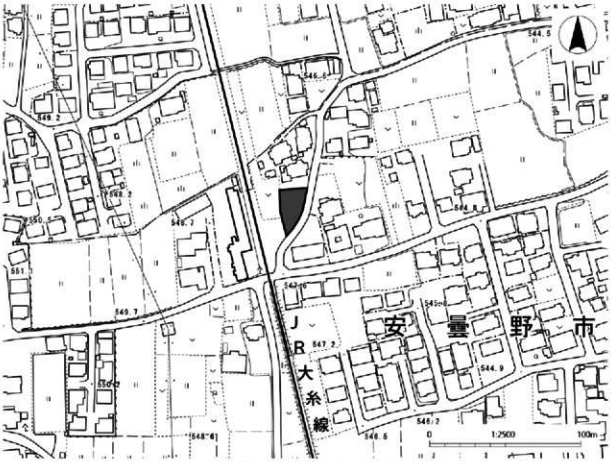
調査地遠景（南東から）

Ａトレンチ（東から）

Ａトレンチ土層

写真１　試掘　潮遺跡群潮神明宮前遺跡

2　試掘　大坪沢遺跡（おおつぼさわ）（第１表■91）



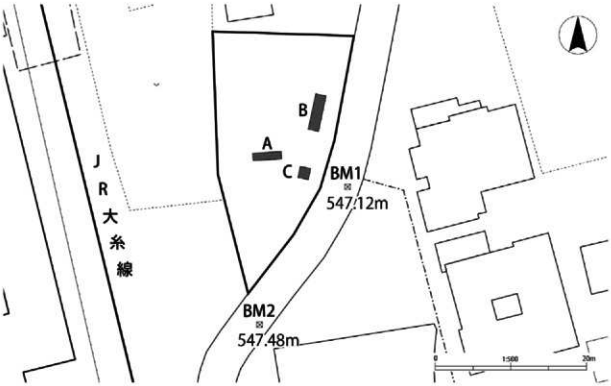
第７図　大坪沢遺跡試掘位置図

所　在　地	安曇野市穂高柏原1705番１
調 査 期 間	平成28年（2016）10月７日
調 査 面 積	11m^2
調 査 契 機	集合住宅

(1)　概要

大坪沢遺跡は、烏川（からすがわ）扇状地扇央に所在する弥生、平安時代の集落跡である。この遺跡で、これまでに発掘調査が実施された記録はない。

今回の調査では調査地に３箇所のトレンチ（A～C）を設定し、土層及び遺構・遺物の検出を試みた。調査の結果、Bトレンチの第３層下部から土師器小破片が出土した。器形がわかるものには小型甕がある。このため、平面・断面観察で遺構検出に努めたが、遺構は確認していない。出土土師器も摩耗した小破片のみであり二次堆積の可能性が高い。したがって、付近に平安時代の遺構が存在する可能性はあるものの、今回の調査地で土木工事等を実施する際に埋蔵文化財に新規の影響を与える可能性は低く、掘削の浅い工事では本調査不要と考えられる。後日、事業実施に際し工事立会いを実施したが、遺構等は確認されなかった。



第８図　大坪沢遺跡トレンチ配置図

調査地近景（南東から）

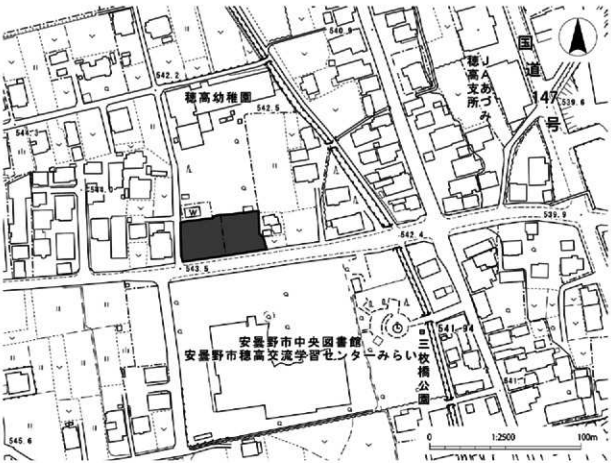
調査地遠景（南から）

Ｂトレンチ（北から）

Ｂトレンチ土層

写真２　試掘　大坪沢遺跡

3　試掘　藤塚（ふじつか）遺跡　（第１表■110）



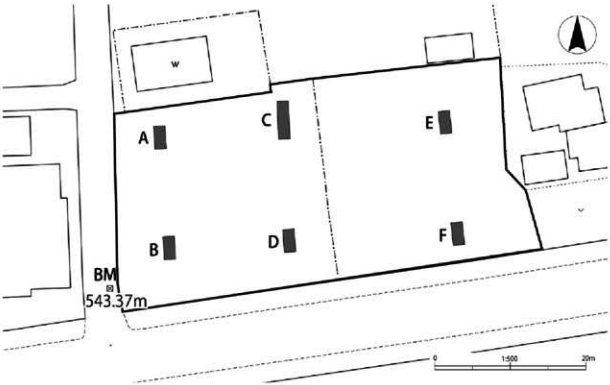
第９図　藤塚遺跡試掘位置図

所　在　地	安曇野市穂高6801番１外４筆
調査期間	平成28年（2016）11月２日
調査面積	30m^2
調査契機	その他開発（駐車場造成）

(1)　概要

藤塚遺跡は、烏川扇状地扇央に所在する古墳時代から平安時代の集落跡である。この遺跡では、交流学習センター建設に際し、平成19年（2007）に発掘調査を実施しており、奈良時代の集落が確認された（安曇野市教委2009）。

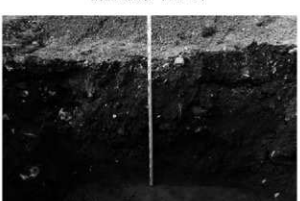
今回の試掘では、駐車場造成に先立ち、調査地に６箇所のトレンチ（A～F）を設定して土層観察及び遺構・遺物の検出を試みた。この結果、Bトレンチ及びFトレンチから土師器小破片が出土した。器形がわかるものはなく、特にBトレンチ出土土器は小破片で摩耗しており二次堆積の可能性が高い。また、Eトレンチでは遺構覆土の可能性が高い土層を確認したが、調査範囲が狭小のため平面形は不明である。この調査では明確に遺構等を確認することはできなかったが、付近に存在する可能性はあるため、付近で土木工事を行う場合は注意が必要である。



第10図　藤塚遺跡トレンチ配置図

調査地遠景（北から）

調査地近景（南東から）

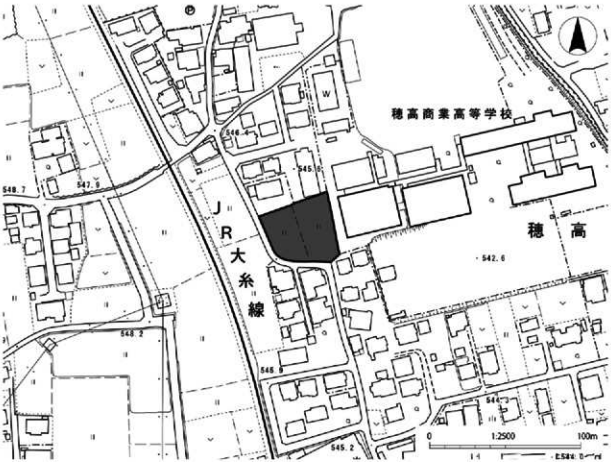


Ｂトレンチ土層

Ｅトレンチ土層

写真３　試掘　藤塚遺跡

4　試掘　藤塚遺跡　（第１表■140）



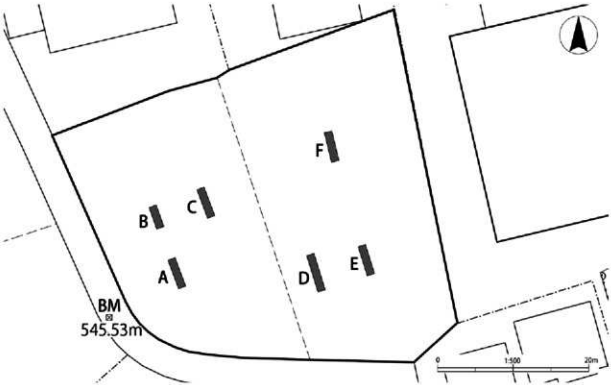
第11図　藤塚遺跡試掘位置図

所在地	安曇野市穂高6823番３外１筆
調査期間	平成28年（2016）12月20日
調査面積	24m^2
調査契機	宅地造成

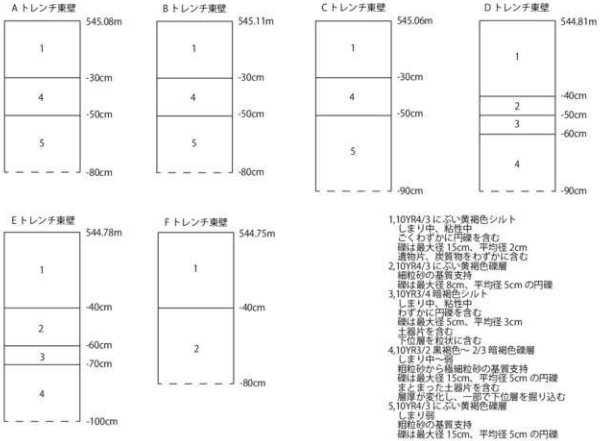
(1)　概要

藤塚遺跡は、烏川扇状地扇央に所在する古墳時代から平安時代の集落跡である。調査地では、昭和49年（1974）の長野県による『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告　第四巻』の報告で、扁平な岩石10点を規則的に配置した礎石の存在が示されている（長野県文化財保護協会復刻1974）。

宅地造成に先立ち、６箇所のトレンチ（A～F）を設定して遺構・遺物の検出を試みた。この結果、A、D及びＥトレンチから土器小破片が出土した。このうちＤトレンチ出土土器は弥生時代中期に属する。D、Ｅトレンチでの遺物出土状況からは、付近に遺構が存在する可能性が高いと考えられる。なお、長野県が報告している礎石の出土地点にはトレンチを設置できなかった。土器出土状況から、本件調査地のうち敷地西側部分では、今後、掘削の浅い工事では本調査不要だが、敷地東側部分での掘削を伴う工事では注意が必要である。



第12図　藤塚遺跡トレンチ配置図

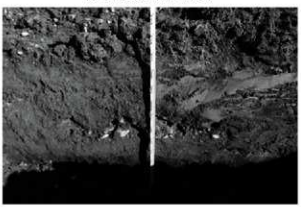


第13図　藤塚遺跡土層概念図

調査地遠景（南から）

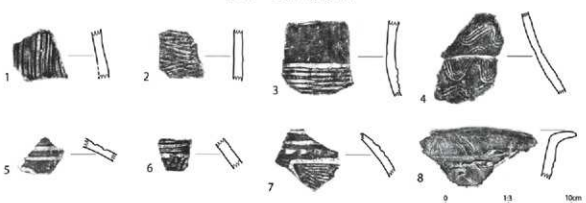
調査地近景（南西から）

Ｄトレンチ土層



Ｅトレンチ土層

写真４　試掘　藤塚遺跡



第14図　藤塚遺跡出土土器

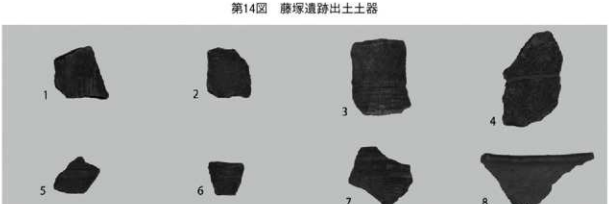


写真５　藤塚遺跡出土土器

(2) 遺物

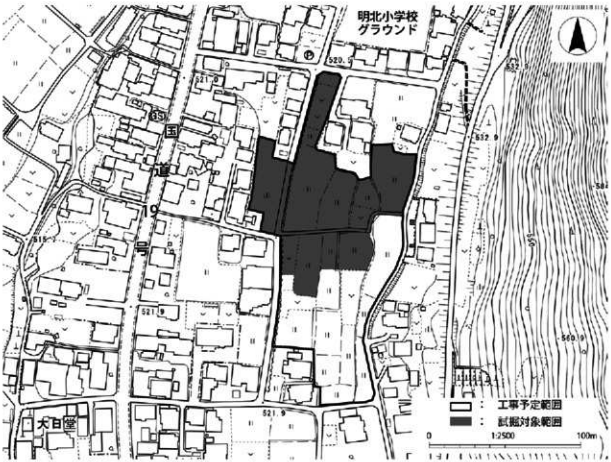
今回の藤塚遺跡試掘では、Ｄトレンチ第４層から弥生時代中期前半の土器片がまとまって出土した。この中から７点を資料化し、Ｅトレンチ出土資料と共に提示する。なお、Ｄトレンチの出土弥生土器は、近隣の南原遺跡（穂高町教委2001a）、芝宮南遺跡（安曇野市教委2016）出土資料とほぼ同時期で出土状況も類似する。このため、この報告での弥生土器の記載は芝宮南遺跡報告書にある分類基準に従う。

１は、外面調整が条痕主体の甕Ａとした。条痕は縦方向、原体は４条一単位で、施文方向は左から右となっている。内面調整は、丁寧なナデである。２も、外面調整に条痕を主体とする甕Ａである。条痕は横方向に施され、羽状条痕になる可能性もあるが、小破片のため全容は不明となっている。内面調整は、丁寧なナデである。３は、長頸壺の頸部及び体部上半破片で、体部上半に平行沈線を施す。文様・意匠類型では、沈線文を主体とする有文１類となる。最上段の沈線のみ幅５mm 程度で、他の沈線に比較して太く、深い。下段の平行沈線は少なくとも５条確認できる。器面調整は、内外面ともにナデで、内面には粘土の輪積み痕跡が残る。４は、壺の頸部から体部上半の破片である。４条１単位の櫛歯状原体で、振幅25mm 程度の波状文を３段以上施している。文様・意匠類型では、有文第４類Ｃ群に分類できる。内面は、ナデ調整している。５は、壺の体部上半破片で、幅3.5mm 程度の太い沈線文をもつ。小破片であるため、意匠全体は不明であるが、文様・意匠類型では有文第４類Ｅ群に分類できる。内外面共に、ナデ調整されている。６も、壺の体部上半破片で、沈線区画と縄文を施される有文第２類Ａ群となる。沈線は３条以上の浅い平行沈線になるため、櫛歯状工具を使用している可能性もある。内面は、ナデ調整が施される。７は、太型沈線区画と縄文を特徴とする壺の体部上半破片である。沈線は、幅４mm 程度と太い。沈線間に刺突を施しており、沈線と同一工具で施文されている。縄文はLR 縄文で、意匠内に充填される。文様・意匠類型では有文第２類Ｂ群に分類できる。内面は、ナデ調整している。８は、Ｅトレンチ出土の土師器甕である。体部は縦方向の粗いケズリ調整で、口縁付近の横ナデがこれを切る。内面も横ナデ調整である。口縁部の開きは強く、ほぼ直角になる。今回、図示できなかったがＥトレンチからの共伴資料に内黒土器があるため、本資料も平安時代の土師器と考えられる。

第２表　藤塚遺跡出土土器観察表

No.	トレンチ	層位	種別	器種	残存部位	口径(cm)	頸部径(cm)	最大径(cm)	最大径部位	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴		
												外面	内面	底部
1	Ｄトレンチ	第４層	弥生土器	甕	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	条痕	ナデ	不明
2	Ｄトレンチ	第４層	弥生土器	甕	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	条痕	ナデ	不明
3	Ｄトレンチ	第４層	弥生土器	壺	頸部～体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明
4	Ｄトレンチ	第４層	弥生土器	壺	頸部～体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明
5	Ｄトレンチ	第４層	弥生土器	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線	ナデ	不明
6	Ｄトレンチ	第４層	弥生土器	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	LR 縄文＋沈線	ナデ	不明
7	Ｄトレンチ	第４層	弥生土器	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋沈線＋LR 縄文	ナデ	不明
8	Ｅトレンチ	第４層	土師器	長胴甕	口縁部～体部上半	17.2	不明	不明	不明	不明	不明	ケズリ＋横ナデ	横ナデ	不明

5　試掘　潮遺跡群浦田遺跡（第１表■179）



第15図　潮遺跡群浦田遺跡試掘位置図

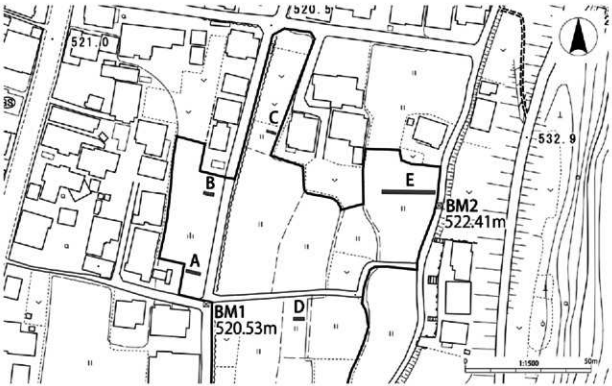
所　在　地	安曇野市明科東川手722番１外４筆
調 査 期 間	平成29年（2017）３月７日～平成29年（2017）３月８日
調 査 面 積	49m^2
調 査 契 機	土地区画整理

(1)　概要

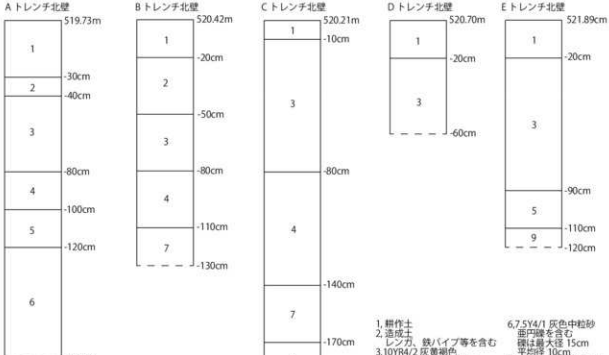
潮遺跡群浦田遺跡は、犀川右岸の河岸段丘上に所在する古代以降の散布地である。この遺跡で、これまでに発掘調査が実施された記録はない。

土地区画整理に先立ち、事業計画範囲の北部に調査地を設定し、５箇所のトレンチ（A～E）で土層観察及び遺構・遺物の検出を試みた。この結果、Eトレンチ第３層から器種・時代不明の土器小破片１点が出土した。同層検出面では溝のような平面形を検出したが、炭質物や遺物は確認されず、人為的な溝である可能性は低いと判断した。また、Cトレンチ第８層では泥炭層が確認された。

以上の結果から、今回調査地（第15図の試掘対象範囲）に遺構等が存在する可能性は低く、土地区画整理の工事では本調査不要と考えられる。しかし、計画範囲の南部では今回調査ができなかったため、今後の試掘が必要である。なお、Cトレンチ第８層の堆積物を採取し、大型植物遺体の同定、花粉分析、放射性炭素年代測定を行った。



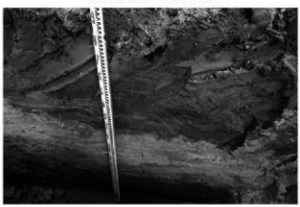
第16図　潮遺跡群浦田遺跡トレンチ配置図



第17図　潮遺跡群浦田遺跡土層概念図

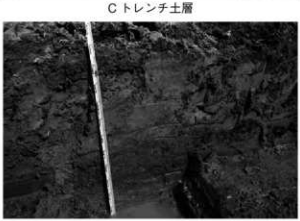
調査地遠景（南東から）

Ｃトレンチ（西から）

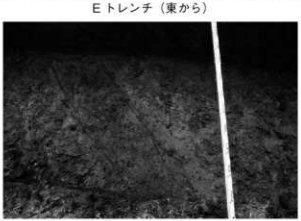


Ｃトレンチ土層

Ｅトレンチ（東から）

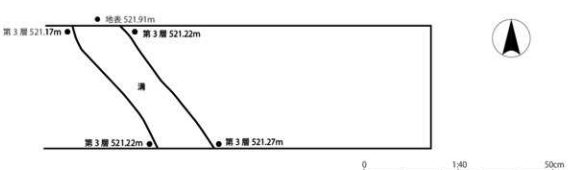


Ｅトレンチ土層



Ｅトレンチ第３層検出面（南から）

写真６　試掘　潮遺跡群浦田遺跡



第18図　Ｅトレンチ第３層検出図

⑵　自然科学分析

潮遺跡群浦田遺跡の大型植物遺体分析

株式会社パレオ・ラボ
バンダリ スダルシャン・佐々木由香

１．はじめに

長野県安曇野市明科東川手に位置する潮遺跡群浦田遺跡は、犀川右岸の河岸段丘上に立地する古墳時代～近世の遺物散布地である。ここでは、有機物が多く含まれる層の堆積物を採取し、大型植物遺体の同定を行った。なお、同じ層の試料を用いて放射性炭素年代測定と花粉分析も行われている（別項参照）。

２．試料と方法

分析試料は、Ｃトレンチ第８層から採取された堆積物１試料である。土相は、未分解有機物を含むオリーブ黒（7.5Y　2／2）シルト質粘土である。同層から出土した炭化した草本植物（PLD-34956）を測定した結果、２σの暦年代範囲で775-727 cal BC（19.5%）、718-706 cal BC（1.5%）、695-541 cal BC（74.3%）で、縄文時代晩期後葉に相当する暦年代が得られている（放射性炭素年代測定の項参照）。

試料の水洗は、パレオ・ラボで行った。試料300cc を、最小0.5mm 目の篩を用いて水洗した。同定・計数は、肉眼及び実体顕微鏡下で行った。

３．結果及び考察

大型植物遺体を同定した結果、同定可能な大型植物遺体は全く含まれていなかった。大型植物遺体は好気的な環境下では化石として残りにくい。細かい根状の植物遺体は見られたが、堆積中あるいは堆積後に乾燥状態に晒されるなど、生の大型植物遺体が残存しにくい環境下で堆積したと推定される。

第19図　水洗後の残渣
（左：全体、右：拡大。全体写真のスケールは１mm、拡大写真は任意）

潮遺跡群浦田遺跡の花粉分析

株式会社パレオ・ラボ
森　将志

１．はじめに

潮遺跡群浦田遺跡において、遺跡周辺の古植生を検討するために花粉分析試料が採取された。以下では、試料に対して行った花粉分析の結果を示し、考察した。

２．試料と方法

分析試料は、試掘Ｃトレンチの第８層から採取された未分解有機物を含むオリーブ黒（7.5Y　2／2）シルト質粘土１点である。なお、同一層準で採取された堆積物は大型植物遺体分析も行われている。さらに、同一層準で産出した炭化した草本の放射性炭素年代測定では、縄文時代晩期後葉に相当する年代値が得られている。この試料について、以下の手順で分析を行った。

試料（湿重量約４g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。作製したプレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本（PLC.2257～2262）を作製し、写真を第20図に載せた。

３．結果

検鏡した結果、検出された花粉は、樹木花粉10、草本花粉３、形態分類のシダ植物胞子２の計15である。これらの花粉・胞子の一覧表を第３表に示した。なお、今回の分析試料は、いくつかの分類群の産出が確認できたものの、量が十分ではなかったため、分布図は示していない。

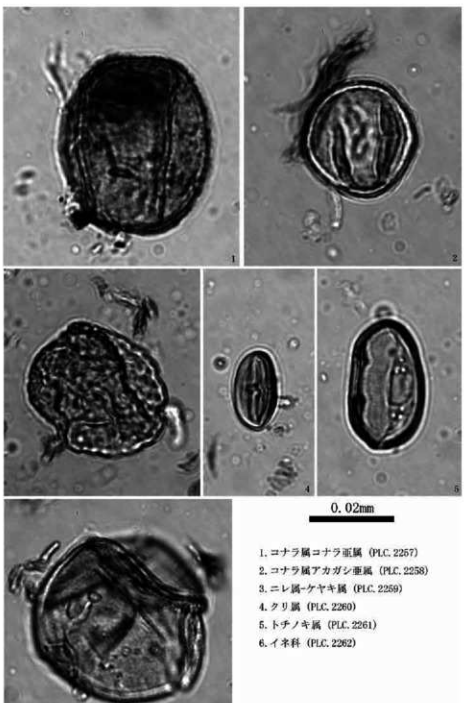
第３表　産出花粉胞子一覧

学名	和名	
樹木		
Abies	モミ属	3
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	1
Cryptomeria	スギ属	2
Pterocarya − *Juglans*	サワグルミ属－クルミ属	2
Carpinus − *Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	2
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	11
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1
Castanea	クリ属	4
Ulmus − *Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	1
Aesculus	トチノキ属	1
草本		
Gramineae	イネ科	10
Apiaceae	セリ科	1
Tubuliflorae	キク亜科	2
シダ植物		
monolete type spore	単条溝胞子	1
trilete type spore	三条溝胞子	4
Arboreal pollen	樹木花粉	28
Nonarboreal pollen	草本花粉	13
Spores	シダ植物胞子	5
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	46
	不明花粉	6

４．考察

今回の分析試料には十分な量の花粉化石が含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。し

たがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。同一試料を用いて大型植物遺体分析も行われているが、大型植物遺体の保存状態も良好ではなかった。大型植物遺体も好気的環境下では化石として残りにくい。今回の分析試料は、花粉や大型植物遺体がほとんど含まれていないため、堆積時あるいはその後の環境において非常に乾燥した状況に晒された可能性が考えられる。花粉の保存状態が悪い中で、産出した分類群を見ると、コナラ属コナラ亜属をはじめ、サワグルミ属-クルミ属やクマシデ属-アサダ属、クリ属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属などの落葉広葉樹が産出している。よって、遺跡周辺にはこうした分類群からなる落葉広葉樹林が広がっていた可能性がある。



第20図　産出した花粉化石

潮遺跡群浦田遺跡の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・黒沼保子

１．はじめに

安曇野市の潮遺跡群浦田遺跡から採取された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

潮遺跡群浦田遺跡の試料は、C 区のトレンチの第８層から出土した炭化草本（PLD-34956）で、調査所見によれば時期は不明である。

測定試料の情報、調製データは第４表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第４表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34956	遺跡名：潮遺跡群浦田遺跡 調査区：C 区 位置：トレンチ 層位：第８層 試料 No.1	種類：炭化草本 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

３．結果

第５表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C 年代、第21図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同

様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第５表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-34956 潮遺跡群浦田遺跡	−26.87 ± 0.13	2500 ± 21	2500 ± 20	764-748 cal BC（ 9.5%） 685-666 cal BC（10.9%） 642-587 cal BC（33.5%） 582-556 cal BC（14.3%）	775-727 cal BC（19.5%） 718-706 cal BC（ 1.5%） 695-541 cal BC（74.3%）

４．考察

各試料の暦年較正結果のうち２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、試料ごとに結果を整理する。なお、縄文時代と弥生時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林（2009）を参照した。

潮遺跡群浦田遺跡のＣトレンチの第８層から出土した炭化草本（PLD-34956）は、775-727 cal BC（19.5%）、718-706 cal BC（1.5%）、695-541 cal BC（74.3%）の暦年代を示した。これは縄文時代晩期後葉の暦年代に相当する。草本は一年生と思われるため、測定結果は植物が枯死した年代を示していると考えられる。

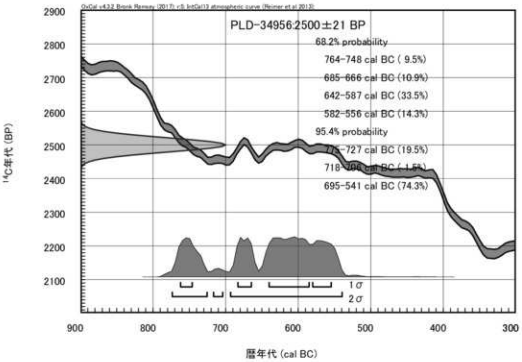
引用・参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（１）, 337-360.

小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82．雄山閣.

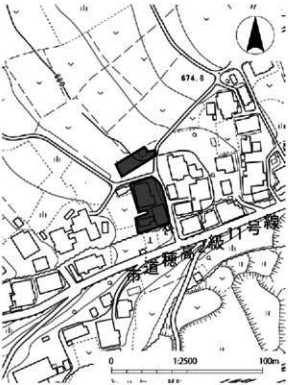
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C 年代」: 3-20．日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（４）, 1869-1887.


OxCal v4.2.2 Bronk Ramsey (2017); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
PLD-34956:2500±21 BP
68.2% probability
764-748 cal BC (9.5%)
685-666 cal BC (10.9%)
642-587 cal BC (33.5%)
582-556 cal BC (14.3%)
95.4% probability
725-727 cal BC (19.5%)
718-700 cal BC (1.5%)
695-541 cal BC (74.3%)
1σ
2σ
2900
2800
2700
2600
2500
2400
2300
2200
2100
14C年代 (BP)
900
800
700
600
500
400
300
暦年代 (cal BC)

第21図　暦年較正結果

6　工事立会　草深（くさぶか）遺跡（第１表●60、●119）



第22図　草深遺跡立会位置図

第23図　草深遺跡土層概念図

所 在 地	穂高牧1550番の一部（倉庫） 穂高牧1551番２（住宅）	調査期間	平成28年（2016）８月３日（倉庫） 平成28年（2016）11月14日～11月15日 （住宅）
対象面積	69m²（倉庫） 99m²（住宅）	調査契機	農業用倉庫 個人住宅

(1)　概要

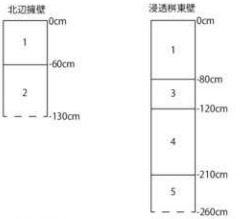
農業用倉庫の基礎掘削に際し土層観察を実施したところ、現在の耕作土中に縄文土器、黒曜石片等が混入していた。出土遺物は散発的な平面分布であり二次堆積と考えられる。個人住宅の基礎掘削では、耕作土下の40cm で、近年に掘り込まれたものとみられるピット２基を確認したが、その他の遺構は確認されなかった。施工地付近では遺物が地表面に散在している箇所がある。

(2)　遺物

表面採集した遺物のうち縄文土器１点を資料化した（第34図１）。縄文時代中期後葉に特徴的な釣手付深鉢の釣手上部の破片であり、表面・裏面ともに、やや不規則な綾杉文が施される。また、管状の工具による、深さにばらつきのある刺突文が荒く刻まれている。上面と下面はナデ調整である。

7　工事立会　明科遺跡群上郷遺跡（第１表●81）

第24図　明科遺跡群上郷遺跡立会位置図



第25図　明科遺跡群上郷遺跡土層概念図

所　在　地	明科中川手3650番１外８筆	調 査 期 間	平成28年（2016）９月２日～９月９日
対 象 面 積	2221m^2	調 査 契 機	児童福祉施設

(1)　概要

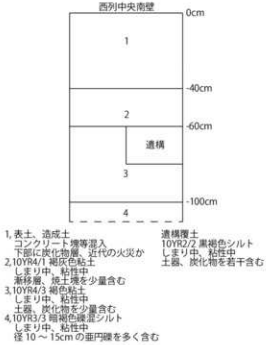
敷地北辺擁壁及び浸透桝の掘削に際し、土層観察を実施した。浸透桝地点では、層厚80cm の造成土（第１層）下に黒褐色シルト層（第３層）の堆積を確認した。壁面及び発生土の確認の結果、この第３層には土器類が包含されていることがわかった。遺構の検出も試みたが、掘削範囲が狭小であるため、確認できなかった。このため、本件施工地付近には埋蔵文化財が良好に残存している可能性が高い。

(2)　遺物

出土遺物のうち、縄文土器２点、須恵器１点を資料化した（第34図２～４）。２は、縄文土器の深鉢破片であり、縄文原体はやや不明瞭であるが無節Ｒである。内面はナデ調整である。繊維を多く含み、縄文時代前期のものと考えられる。３も同様に縄文土器の深鉢破片であり、体部上半～体部下半と思われる。隆線による渦巻文と、横方向の隆線が２条、その下には沈線による明瞭な懸垂文が施されている。この懸垂文は、中部高地の縄文時代中期後葉に位置する曽利Ⅰ式土器の特徴によく一致する。内面はナデ調整である。４は、須恵器甕の破片で、口縁部にあたる。外面、内面ともに横ナデ調整で、内面には全体的に自然釉が付着している。この他にも須恵器甕の体部破片が出土している。

8　工事立会　明科遺跡群栄町（さかえちょう）遺跡（第１表●93）

第26図　明科遺跡群栄町遺跡立会位置図



第27図　明科遺跡群栄町遺跡土層概念図

所　在　地	明科中川手6824番６の一部	調 査 期 間	平成28年（2016）10月12日
対 象 面 積	177m²	調 査 契 機	車庫

(1)　概要

本件工事は６本柱独立基礎のガレージ建設であり、掘削は80cm ×80cm × ６箇所の計画である。掘削の結果、西列及び東列で、それぞれ遺構を確認した（第28図）。

西列の遺構は、南と中央の掘削箇所で確認した。深度は現状地表面からおよそ60cm で、覆土厚は25～40cm である。まとまった遺物は出土しなかったが、南接地での平成23年の調査結果等から古墳時代後期の竪穴建物跡の可能性が高い（安曇野市教委2013）。

東列では、北の掘削箇所で焼土を確認した。壁面精査の結果、竪穴建物東辺に造られたカマドであると判明した。このカマド脇からは、土師器甕が出土している（第34図５）。この遺構も古墳時代後期の竪穴建物跡と考えられる。上記の結果から、施工地には古墳時代後期の集落跡が良好に残存していることを確認した。

(2)　遺物

遺物のうち１点を資料化した（第34図５）。東列北の掘削箇所における竪穴建物跡から出土した土師器甕であり、口縁部から体部上半が残存している。外面、内面ともにナデとハケの調整である。

第28図　明科遺跡群栄町遺跡掘削箇所

調査区俯瞰（北が上）

西列中央　南壁（北から）

西列南　南壁（北から）

東列北　南壁・西壁（北東から）

写真７　工事立会　明科遺跡群栄町遺跡

9　工事立会　上手屋敷遺跡（第１表●112）

第29図　上手屋敷遺跡立会位置図

第30図　上手屋敷遺跡土層概念図

所　在　地	明科中川手2234番２	調 査 期 間	平成28年（2016）10月18日～11月４日
対 象 面 積	567m²	調 査 契 機	個人住宅

(1)　概要

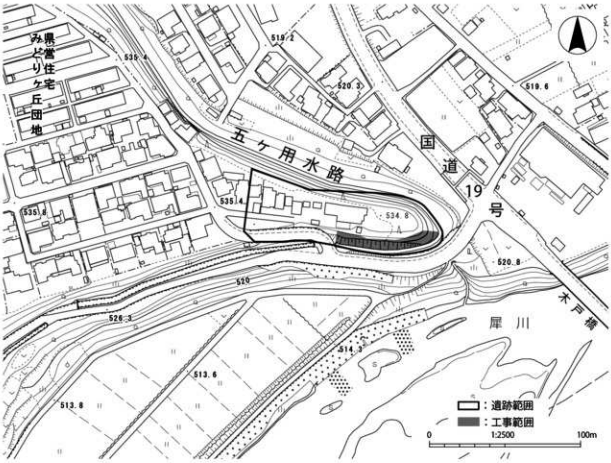
宅地造成及び個人住宅建設に伴い、工事立会を行った。土層の観察は擁壁及び個人住宅基礎の掘削に際して実施した。掘削深は擁壁設置箇所で40cm、個人住宅で基礎51cmである。擁壁西壁の観察により、造成土下およそ15cm以深の第２層にて土器片、石器、炭化物が出土したが、遺構は確認していない。

上手屋敷遺跡では、平成15年（2003）に本件事業箇所北西30mの地点で、公営住宅建設に伴う発掘調査が行われており、竪穴建物跡や古代～中世の遺構が確認されている（明科町教委2004）。また、周囲の土地では土器片等を表層に確認できる。そのため、この一帯には遺構等が良好に存在している可能性があり、今後の土木工事等では注意が必要である。

(2)　遺物

縄文土器片、須恵器片及び石器類が出土し、うち石器２点を資料化した（第35図）。１は、チャート製の石鏃で、先端が欠損している。正面にわずかに自然面を残す。断面が紡錘状で、最大厚1.0cmと厚いため未成品と判断した。２は、同じくチャート製の石錐で、長軸5.7cmを測る。腹面に一次剥離面を多く残す。

10　工事立会　狐城（きつねじょう）（第１表●153）



第31図　狐城立会位置図

所　在　地	明科七貴7222番58	調 査 期 間	平成29年（2017）１月25日
対 象 面 積	474m²	調 査 契 機	法面崩落対策工事

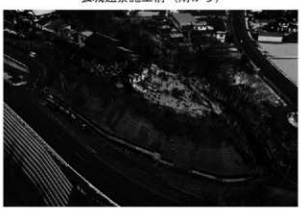
(1)　概要

狐城は、犀川左岸の舌状台地突端に所在する中世の城館跡である。この遺跡では、これまでに本格的な発掘調査が実施された記録はない。

本工事は、長野県建設部建築住宅課が実施する法面崩落対策工事である。施工地は、城館跡主郭下の法面である。事前の現地確認において、岩盤が露出しており、切岸造成等の施工はなされておらず自然地形であることを確認した。本工事は、法面崩落対策のためのモルタル吹付工であり、掘削はアンカーボルト打設等のみとなる。従って土層観察等が可能な規模の掘削はなく、崖面は岩盤であるため、発掘調査は不可能である。事業者である長野県建設部との協議の結果、将来現状復元可能な工法とし、写真撮影による現状の記録を行った。

狐城遠景施工前（南から）

狐城遠景施工前（南東から）



狐城全体（南東から）

狐城俯瞰（北が上）

モルタル吹付け施工面（南西から）

モルタル吹付施工面（西から）

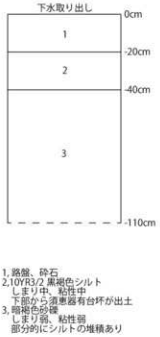
モルタル吹付け施工面（東から）

モルタル吹付工事施工後（南西から）

写真８　工事立会　狐城

11　工事立会　追堀（おっぽり）遺跡（第１表●183）

第32図　追堀遺跡立会位置図



第33図　追堀遺跡土層概念図

所　在　地	穂高柏原1675番９外３筆	調 査 期 間	平成29年（2017）３月10日～３月15日
対 象 面 積	403m^2	調 査 契 機	宅地造成、下水道取出し

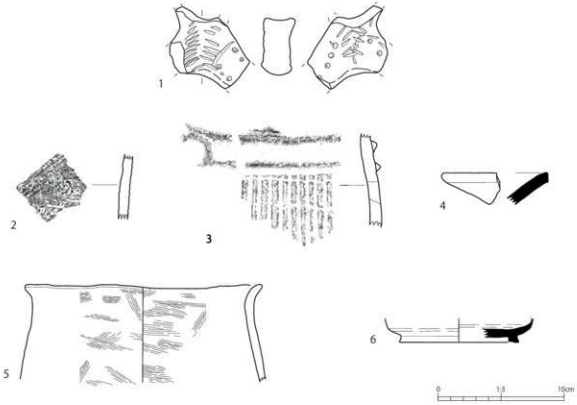
(1)　概要

宅地造成及び下水道取出し工事に伴い、工事立会を実施した。周囲は住宅地として造成されている。およそ20cm 厚の表土除去時に、第２層から須恵器有台坏が出土したが、明確な遺構は確認できていない。この遺物は、矢原（やばら）遺跡群一帯では現代の土壌改変を受けていない場所であれば、深度80cm 程度以深での出土が一般的である。今回、深度20cm 程度で出土した原因は、従前の宅地造成で大規模な土壌改変があったためと推察できる。

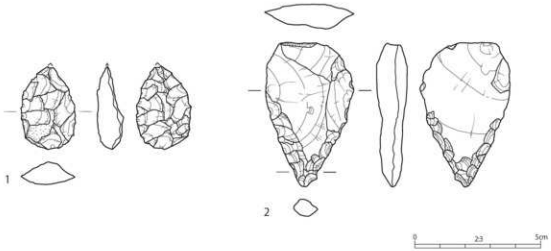
上記の結果から、本件施工地付近に遺構等が存在する可能性があるため、今後の土木工事では注意が必要である。

(2)　遺物

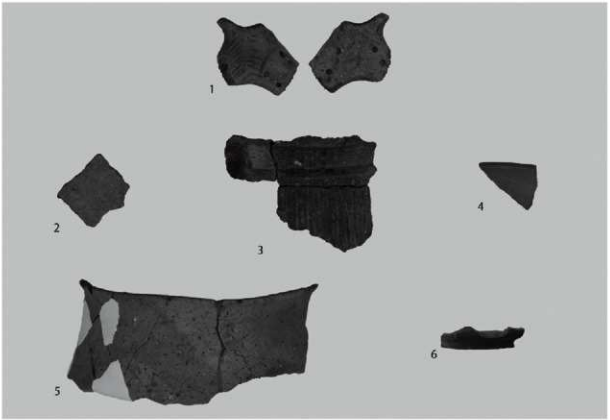
須恵器１点を資料化した（第34図６）。有台坏の破片で、台は外側に向かって開いている。推定底径は11.4cm である。



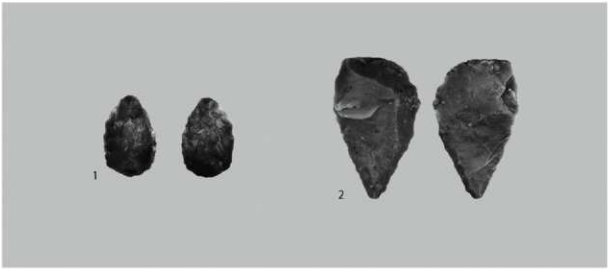
１：草深遺跡　２～４：明科遺跡群上郷遺跡　５：明科遺跡群栄町遺跡　６：追堀遺跡
第34図　工事立会出土土器



１～２：上手屋敷遺跡
第35図　工事立会出土石器



１：草深遺跡　２～４：明科遺跡群上郷遺跡　５：明科遺跡群栄町遺跡　６：追堀遺跡
写真９　工事立会出土土器



１～２：上手屋敷遺跡
写真10　工事立会出土石器

第３章　宮脇（みやわき）遺跡第１次発掘調査

１　調査の契機と経過

⑴　調査の概要

所 在 地　　長野県安曇野市穂高6616番、6617番１、6619番１、6620番１

調査面積　　９m^2

調査原因　　宅地造成

発掘作業　　平成28年（2016）７月15日（金）

整理作業　　平成28年（2016）７月15日（金）～平成30年（2018）３月30日（金）

⑵　調査の契機と経過

調査原因となった事業は、９区画宅地分譲のための宅地造成である。工事に伴う掘削計画は、切土、L字擁壁工、排水構造物工である。

平成28年５月６日付で事業主体者から「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」（文化財保護法第93条第１項）が提出された。事業計画の掘削面積が11m^2と比較的小さい上、施工地での事前試掘が実施できなかったため、記録保存が必要である旨の意見を付して、同年５月９日付長野県教育委員会教育長にあて進達した。これに対し、同年５月17日付「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で長野県教育委員会教育長から、埋蔵文化財保護措置を記録作成のための発掘調査とする旨の通知があったため、この通知に基づき発掘調査を実施することとなった。

発掘調査における現場作業は、平成28年（2016）７月15日（金）に実施した。調査終了後、安曇野市教育委員会教育長名で、８月８日付長野県教育委員会教育長あて発掘調査終了報告書を提出した。

なお、本事業における「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」及び安曇野市教育委員会教育長の意見書では穂高高校北遺跡と表記したが、その後の遺跡分布の見直しにより、本報告書では宮脇遺跡として扱うこととする。

⑶　調査体制

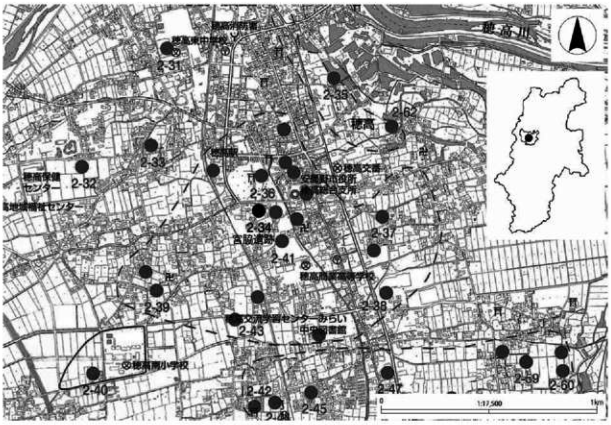
調査主体　　安曇野市教育委員会

調査担当者　　山下泰永（文化課課長補佐兼文化財保護係長）、横山幸子（文化課文化財保護係）

調査員　　松田洋輔、横山幸子（以上、文化財保護係）

⑷　発掘作業・整理作業の経過

現場での発掘作業は、平成28年（2016）７月15日（金）に実施した。資料化できる遺物は出土しなかったため、平成28年度中に図版作成のみ実施し、平成29年度に報告書の執筆を行った。



第36図　宮脇遺跡位置図

第６表　宮脇遺跡付近の遺跡

No.	遺跡名	種　類	時　代
2-31	辻遺跡	集落跡	古墳・平安
2-32	一本松遺跡	集落跡	平安
2-33	神の木遺跡	集落跡	平安
2-34	**宮脇遺跡**	**集落跡**	**弥生・平安・中世**
2-35	等々力町中上巾下遺跡	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安
2-36	穂高神社境内遺跡	集落跡	弥生・奈良・平安
2-37	北ずの神遺跡	集落跡	古墳・平安
2-38	藤塚遺跡	集落跡	古墳・平安
2-39	宗徳寺遺跡	集落跡	平安
2-40	芝宮南遺跡	集落跡	弥生・平安

No.	遺跡名	種　類	時　代
2-41	穂高高校北遺跡	集落跡	平安
2-42	大坪沢遺跡	集落跡	平安
2-43	南原遺跡	集落跡	弥生
2-44	長者池遺跡	集落跡	古墳・平安
2-45	迫堀遺跡	集落跡	平安
2-47	三枚橋遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
2-59	堀之内遺跡	集落跡	古墳・中世
2-60	矢原巾上遺跡	集落跡	古墳
2-62	等々力城跡	城館跡	中世

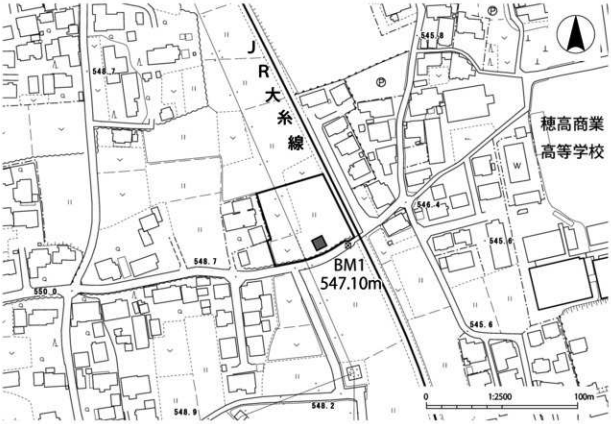
2　調査の方法

宮脇遺跡第１次発掘調査の調査原因である宅地造成の予定地が、周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、宮脇遺跡はこれまで本格的な発掘調査が行われておらず、本件でも事前の試掘が不可能であったため、記録保存のための発掘調査を実施した。

発掘調査の契機となった開発事業のうち、計画面積11.7m^2、掘削深3.2m の地下浸透桝が最も深い掘削となるものである。その他の掘削では、切土及び擁壁工及び排水溝が計画されていた。切土は厚み20cm 程度で、耕土の除去のみであるため、遺構面に影響は与えないと判断した。また、擁壁工及び排水溝は発掘調査を行うには狭小である。したがって、工事に伴う掘削計画のうち、最も面積が広く深い掘削を伴う地下浸透桝の埋設予定箇所において調査を実施した。なお、現場では計画面積11.7m^{2}に対し、実際は９m^{2}の掘削であったため、調査面積は９m^{2}となる。

発掘調査では、遺跡の存在する深度が不明のため、遺構面が検出されるまで建設用重機により土を除去したが、遺構が検出されなかったため、全て建設用重機によって計画深度まで掘り下げた。現場の記録写真はデジタルカメラを使用した。

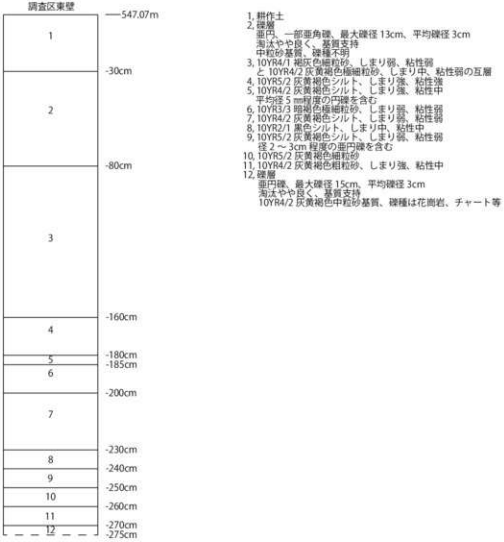
整理作業として、現場作業終了後に室内で図面の調整・報告書作成を行った。資料化できる遺物の出土はなかったため、遺物整理作業はない。



第37図　宮脇遺跡調査区配置図

３　層序

今回の調査で観察できた土層の詳細は、第38図のとおりである。このうち第１層は現代の耕作土であり、第２層から第12層が自然堆積層である。第４層、第５層、第７～９層のシルト層と第３層、第10層、第11層などの砂層が互層となっている。また第２層、第12層は花崗岩、チャートを主体とする礫層であり、烏川上流域の地質と調和的である。第４層でおよそ１cm 程度の摩耗した土器片が１片出土したが、遺構・炭質物等は見られなかったため、流れ込みによるものと判断した。



第38図　宮脇遺跡土層概念図

4　調査の総括

今回の発掘調査は、これまでに本格的な発掘調査が行われていないため詳細が不明な宮脇遺跡の第１次発掘調査となった。調査では９m^2の範囲で地表下およそ280cm まで掘り下げ、遺構、遺物の検出を試みたが、遺構は確認できず、流入と見られる土器小破片（時期不明）が１点出土したのみであった。今回の調査地における宅地造成工事に際し、平成28年（2016）10月11日に実施した工事立会では、第１次発掘調査と同様の堆積がみられ、摩耗した土器小破片が単独で出土した。以上の結果から、発掘調査及び工事立会で遺構等は確認されず、本件工事が埋蔵文化財に影響を与えていないことを認めた。

今回の発掘調査で実施した土層観察では、シルト層と砂礫層の互層を確認した。砂礫層の存在は、この場所で度々自然流が流れていたことを示唆する。安曇野市教育委員会は、穂高神社（ほたかじんじゃ）境内遺跡の発掘調査において、今回の調査地の東側で烏川の自然流を利用した水路が存在していることを示した（安曇野市教委2018）。また、穂高町教育委員会の調査によると、この自然流を利用した水路が今回の調査地南側に隣接する形で存在している（穂高町教委2001a）。今回の土層観察結果と安曇野市教育委員会及び穂高町教育委員会の報告から、調査地は自然流の影響を受けた場所であると考えられる。自然流の上流側と考えられる調査地西側には、宗徳寺（そうとくじ）遺跡が所在しているが、今回の調査では比較可能な遺物や層位は確認できなかった。

宮脇遺跡が所在する穂高地域において、過去に安曇野市教育委員会が発掘調査を行った藤塚遺跡及び三枚橋遺跡では、共に鉄分の沈殿層の直下及び下位20～30cm の範囲で奈良時代・平安時代の遺構を検出している（安曇野市教委2009、2010）。しかし、遺構面の目安となる鉄分の沈殿層が、今回の調査では確認できなかった。

宮脇遺跡では、JR 穂高駅の西側一帯で土地区画整理事業に際し、平成21年（2009）に安曇野市教委により23箇所のトレンチを設置する試掘調査が実施されている（安曇野市教委2010）。このうち、今回の調査地から北西420m の J トレンチでは、耕作土直下の土層から内黒土器の破片が出土した。また、調査地の南側およそ100～200m の地点では、平成10年（1998）に隣接する南原遺跡の試掘調査が行われている（穂高町教委2001a）。この調査では、弥生時代中期前半の土器片がまとまって出土した。南原遺跡で遺物が出土した深度は、最も浅い箇所で25cm であり、深い箇所は120cm であった。今回の調査面積は狭小であり、明確に遺構の存在を確認することはできなかったが、上記２件の調査の結果から、付近に弥生時代及び平安時代の集落跡が存在する可能性が高いと考えられる。宮脇遺跡について、今後の調査が期待されるとともに、周囲で土木工事等を実施する場合は注意が必要である。

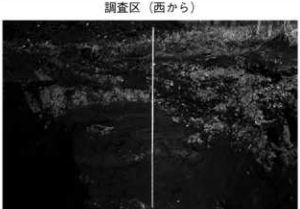
調査区遠景（北東から）

調査区遠景（南東から）

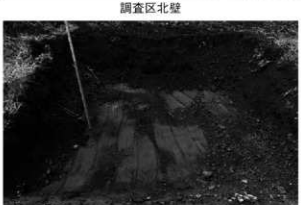
調査区（南から）

調査区（西から）

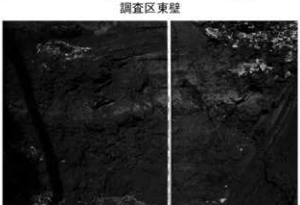
調査区北壁



調査区東壁



自然堆積層検出（北から）



調査区東壁土層

写真11　宮脇遺跡第１次発掘調査

第４章　押野（おしの）城測量調査

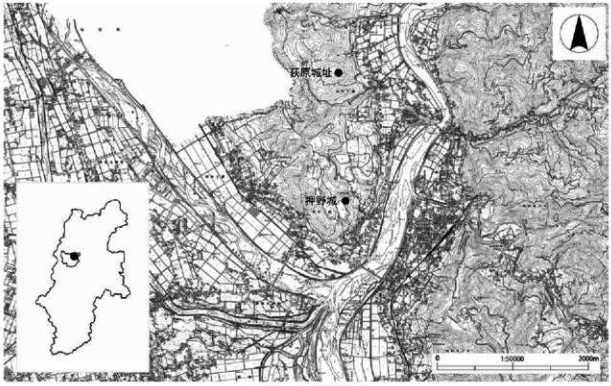
１　調査の契機と経過

平成27年（2015）２月、周知の埋蔵文化財包蔵地である押野城、荻原（おぎわら）城址の範囲において、安曇野市農林部耕地林務課が発注する森林整備に伴う工事により、山城の一部を破壊してしまった事案が発生した。原因は、松枯れ被害に伴う更新伐作業のための作業道開削である。

本事業については、平成26年（2014）７月に、作業道の開設線形案が決まった段階で再度保護協議を行うこととなっていたが、事業契約後、担当課から安曇野市教育委員会へ保護協議の申し出がなく、文化財保護法第94条の通知のないまま工事着工してしまったというものであった。その結果、押野城については主郭南側の堀切と、東側の帯曲輪の一部を破壊する結果となった。なお、荻原城址については、遺跡内の工事であったが、作業道が開設された場所には遺構がなかったことが幸いし遺跡破壊には至らなかった。

前述の事案を受け、安曇野市教育委員会教育部文化課では、平成28年（2016）10月に山城の研究者で長野県埋蔵文化財センター主任調査研究員の河西克造氏から、押野城の山城遺構についての現地指導を仰いだ。

また、今回の作業道開設で新たに掘削された痕跡と、本来の山城遺構との区別が不明瞭になる可能性があると考え、押野城主郭周辺の作業道で掘削された痕跡について地形測量による地形図作成、航空写真による写真地図（オルソ写真）を作成した。作業工期は、平成28年（2016）11月21日～平成29年（2017）２月28日とした。



第39図　押野城位置図

２　遺跡の位置と環境

押野城は、安曇野市北東部にあたる明科地域の押野山に所在する。明科地域では北からの高瀬川、南西からの穂高川、南からの犀川が合流し、合流後は犀川として松本盆地から出て北流する。押野山は合流地点の北側の山塊を指し、押野城は、押野山塊の東側、標高613～623m の小山に立地する。

押野城のうち周知の埋蔵文化財包蔵地は、南北およそ190m、東西およそ130m にわたる。小山の頂上には主郭が、主郭の北西～西側と西側曲輪には土塁が残り、帯曲輪が主郭を取り巻くように５箇所確認されている（明科町史編纂会1984）。また、西側最下部には空堀及び水堀の跡が認められる。宮坂武男氏は、『信濃の山城と館７』において、さらに主郭南側の尾根上に３～４条、主郭北西側に１条の堀切を報告している（宮坂2013）。

押野城の南側には城ヶ平遺跡がおよそ２ha にわたって広がり、縄文土器が出土している（明科町史編纂会1984）。『明科町史』は、城ヶ平遺跡の範囲に、押野城に付随したとみられる馬場、馬場下といった地名が残っていることを指摘した。

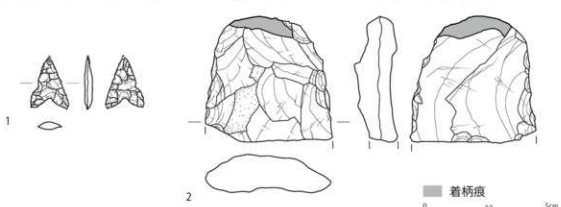
３　地形測量

押野城の現状把握を目的に、地形測量による詳細な地形図の作成と航空写真による写真地図の作成を実施した。得られた測量成果を第41図に示す。

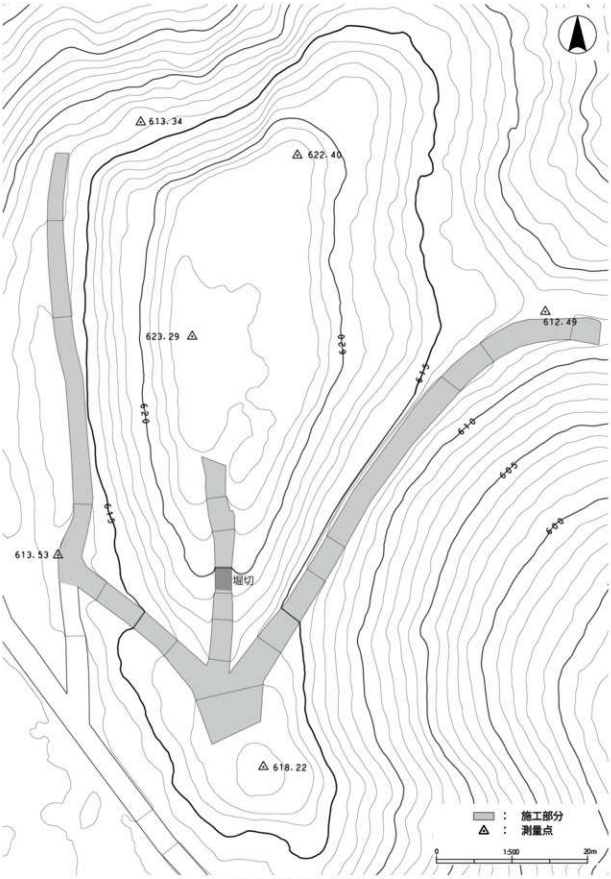
４　出土遺物

作業道開設後の、平成28年（2016）10月24日に採取した石器２点を第40図に示す。これらは南尾根上の堀切の埋土上で発見された。埋土の供給源が堀切の上側か下側か、人為的なものであるかは不明である。押野城南側の城ヶ平遺跡では縄文土器が確認されているため、付近に縄文時代の遺構が存在する可能性がある。

１は、黒曜石製の無茎鏃で、先端がやや欠損しており、残存長は2.0cm を測る。正面から見て左側の稜がやや抉入しており、左右非対称の形状をなす。調整は全体的に均質である。２は、ホルンフェルス製の打製石斧であり、刃部は欠損しており、残存長は5.0cm である。頂部には着柄痕が残る。



第40図　押野城出土石器



第41図　押野城工事施工範囲図

押野城遠景（東から）

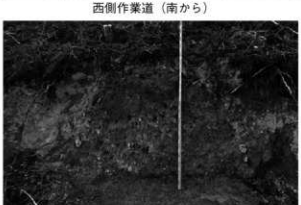
主郭・東側作業道（南東から）

主郭南側作業道（南から）

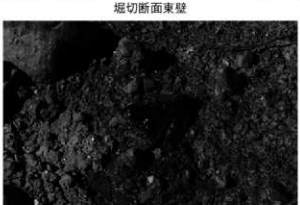
東側作業道（南から）

西側作業道（南から）

堀切断面東壁



東側作業道断面西壁



石鏃出土状況

写真12　押野城測量調査

第５章　等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査

１　調査の契機と経過

⑴　調査の概要

所 在 地	長野県安曇野市穂高4576番、4587番、4598番１、4590番、4594番２
調査面積	64m^2
調査原因	駐車場造成
発掘作業	平成28年（2016）12月26日（月）～平成29年（2017）１月18日（水）
整理作業	平成29年（2017）１月18日（水）～平成30年（2018）３月30日（金）

⑵　事業計画の概要

調査原因となった事業は、駐車場設置のための造成である。敷地面積4689m^2、雨水処理用浸透桝３基の設置と舗装を行う。工事に伴う計画掘削深は、舗装部分において39cm、雨水処理用浸透桝において306cm である。

事業実施前の調査地は水田であり、平成28年（2016）の秋まで耕作されていた。

⑶　調査の契機と経過

等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査は、駐車場造成にかかる緊急発掘調査で、事業主体者は医療法人である。

等々力町巾上巾下遺跡について、南安曇郡誌改訂編纂会が調査地隣接地及びその周辺で、地下１m以深から遺物が出土したと報告している（南安曇郡誌改訂編纂会1968）。穂高町教育委員会が平成13年（2001）に調査地の南およそ100mにおいて実施した第１次発掘調査では、深さおよそ230cm で竪穴建物跡５棟が検出され、須恵器、土師器が出土した（未報告）。安曇野市教育委員会が平成24年（2012）に実施した第１次発掘調査地北側の隣接地で行った試掘調査では、遺構・遺物は確認されなかった（安曇野市教委2014）。

以上のような状況で、平成28年（2016）９月15日に事業者から安曇野市教育委員会に対し、大型浸透桝３基の設置を含む事業計画が提示された。事業者と埋蔵文化財の保護協議を実施したところ、事業計画は変更不可能であり、埋蔵文化財への影響が不可避であることが予想されたため、記録保存のための発掘調査を実施する方向で協議・調整を行った。

協議を進める中で、平成28年（2016）11月２日付で事業主体者から「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」（文化財保護法第93条第１項）が提出され、同日付で安曇野市教育委員会教育長の意見を付して長野県教育委員会教育長にあて進達した。これに対し、11月15日付「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で長野県教育委員会教育長から、埋蔵文化財保護措置を記録作成

のための発掘調査とする旨の通知があったため、この通知に基づき発掘調査を実施することとなった。

発掘調査における現場作業は、平成28年（2016）12月26日（月）～平成29年（2017）１月18日（水）に実施した。調査終了後、安曇野市教育委員会教育長名で、１月18日付で安曇野警察署長あて埋蔵物発見届を、１月27日付長野県教育委員会教育長あて発掘調査終了報告書を提出した。２月７日には、長野県教育委員会教育長から安曇野市教育委員会教育長あてに「文化財の認定及び県帰属について（通知）」が通知され、出土遺物の文化財認定がなされた。当該文化財については、平成29年（2017）７月24日までに所有者が判明せず所有権が長野県に帰属したため、８月18日付「出土文化財譲与申請書」を長野県教育委員会教育長にあて提出し、８月23日付29教文第24－７号にて安曇野市への譲与が承認された。

今回の第２次発掘調査では、浸透桝設置箇所以外は発掘調査を実施していない。遺構深度が深いため、浸透桝設置以外の駐車場造成工事の影響はなく、現状保存されている。

⑷　調査体制

調査主体	安曇野市教育委員会
調査担当者	山下泰永（文化課課長補佐兼文化財保護係長） 土屋和章、横山幸子（以上、文化課文化財保護係）
調査員	大澤慶哲、松田洋輔、土屋和章、横山幸子（以上、文化財保護係）
調査参加者	田多井智恵
整理作業参加者	田多井智恵、宮下智美

⑸　発掘作業・整理作業の経過

今回の調査における現場での発掘作業は、平成28年（2016）12月26日（月）～平成29年（2017）１月18日（水）に実施した。

整理作業は、平成29年（2017）１月18日（水）～平成30年（2018）３月30日（金）の期間中に実施し、本報告書を発行し全事業を終了した。整理作業として平成28年度に図版整理、平成29年度に遺物の洗浄・注記、遺物実測図作成、写真撮影、報告書執筆を行った。

⑹　調査日誌抄

平成28・29年（2016・2017）

12月26日（月）A区、B区、C区表土除去。B区土層観察。SI１、SI２を精査。
12月27日（火）雨天により現場作業中止。
12月28日（水）A区、C区土層観察。午前で現場作業終了。
１月４日（水）積雪、凍結の現場復旧。SI２精査。
１月５日（木）SI２精査。
１月６日（金）C区土層観察。SI２精査。
１月18日（水）D区表土除去。D区土層観察。撤収。

2　遺跡の位置と環境

(1)　地理的環境

等々力町巾上巾下遺跡は、安曇野市穂高地域に所在し、飛騨山脈東麓から東流する烏川の扇状地の扇端と、高瀬川・穂高川・犀川の三川合流により形成された低湿地帯の中間に位置する。今回の調査地は、標高およそ535m で、段丘地形の末端に位置し、地下浸透した烏川の水が湧出する低湿地帯に段丘崖を介し隣接している。烏川水系の上流にあたる西側平地には、穂高神社境内遺跡、神の木遺跡、辻遺跡などが所在し、穂高市街地にほど近い立地となっている。

(2)　歴史的環境

等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査では、弥生時代と中世の遺物・遺構を検出した。

穂高地域では、矢原遺跡群馬場街道遺跡とその周辺から、発掘調査及び採集等で弥生時代の赤彩を施した土器片とそれに関連する遺構が確認されている。三枚橋遺跡では６次にわたる発掘調査で、櫛描波状文のある甕などの弥生土器が出土している（安曇野市教委2010）。八ツ口遺跡第２次発掘調査では、赤彩のある弥生土器が出土した（安曇野市教委2010）。この他、穂高神社境内遺跡において平成27年（2015）に実施した第１次発掘調査では、弥生時代後期に比定される土器片が出土している（安曇野市教委2018）。

安曇野市全域をみると、弥生時代の遺跡として三郷小倉の黒沢川右岸遺跡、豊科田沢の町田遺跡、明科七貫のみどりヶ丘遺跡等で発掘調査がなされ、中期の集落の存在が確認されている（三郷村教委1988、豊科町教委1999、太田・河西1966）。

中世以降については、穂高地域の発掘調査事例は少なく、矢原遺跡群及びその周辺で道構が点在的に確認されている程度である。馬場街道遺跡では、中世の住居跡が１棟確認されている（穂高町教委1987）。また、他谷遺跡の発掘調査によって当該期の地下式道構が検出されている（穂高町教委2001b）。

安曇野市全域としては、東西山麓に戦国期の山城、平地には中近世の館等が築かれた。豊科地域ではこの時期の城館及び集落等の発掘調査が行われている（豊科町教委1992、1993、1994）。集落としては、中央自動車道長野線の建設に先立ち、上手木戸遺跡で昭和61年（1986）に発掘調査が実施され、竪穴建物・掘立柱建物等が見つかっている（長野県埋文センター1989）。

(3)　等々力町巾上巾下遺跡の概要

等々力町巾上巾下遺跡は、平成13年（2001）に穂高町教育委員会が発掘調査を行い、地表下およそ2.3m で奈良時代～平安時代前半の竪穴建物跡５棟を確認した（未報告）。これ以前に、個人によってサイロ建設の際に地表下１m 以深から石包丁、管玉、弥生時代後期の土器類が採集されている（南安曇郡誌改訂編纂会1968、穂高町誌編纂委1991）。また、平成24年（2012）に安曇野市教育委員会による試掘調査が実施されている（第７表）。

第７表　等々力町巾上巾下遺跡発掘調査等記録

調査区分	調査年	調査原因	遺構・遺物の概要	文献
工事中の発見等	不明	農業施設建設等	縄文土器、弥生土器、土師器、灰釉陶器、石器	南安曇郡誌改訂編纂会1968
第１次発掘調査	平成13年（2001）	病院建設	須恵器、土師器、近世の集石・人骨、奈良時代建物跡５棟	未報告
試掘調査	平成24年（2012）	病院増築	なし	安曇野市教委2014
第２次発掘調査	平成28年（2016）～29年（2017）	駐車場造成	弥生土器、中世の陶器等、竪穴建物跡１棟、竪穴状遺構１基	安曇野市教委2018（本書）

第42図　等々力町巾上巾下遺跡位置図

第８表　等々力町巾上巾下遺跡付近の遺跡

No.	遺跡名	種　類	時　代
2-29	貝梅道上遺跡	集落跡	平安
2-31	辻遺跡	集落跡	古墳・平安
2-32	一本松遺跡	集落跡	平安
2-33	神の木遺跡	集落跡	平安
2-34	宮脇遺跡	集落跡	弥生・平安・中世
2-35	**等々力町巾上巾下遺跡**	**集落跡**	**縄文・弥生・奈良・平安**
2-36	穂高神社境内遺跡	集落跡	弥生・奈良・平安
2-37	北才の神遺跡	集落跡	古墳・平安

No.	遺跡名	種　類	時　代
2-38	藤塚遺跡	集落跡	古墳・平安
2-39	宗徳寺遺跡	集落跡	平安
2-40	芝宮南遺跡	集落跡	弥生・平安
2-41	穂高高校北遺跡	集落跡	平安
2-42	大坪沢遺跡	集落跡	平安
2-43	南原遺跡	集落跡	弥生
2-62	等々力城跡	城館跡	中世

第43図　等々力町巾上巾下遺跡調査区位置図

3　調査の方法

今回の調査地で、敷地面積4689m^{2}の駐車場の造成が計画され、計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である等々力町巾上巾下遺跡であるため、記録保存のための発掘調査を念頭に保護協議を行った。

発掘調査の契機となった開発事業の主たる掘削計画は、面積16m^2、掘削深度およそ300cm の大型雨水浸透桝３基、及び施工地全面にわたる深度およそ40cm の舗装のための掘削であった。舗装部分の掘削は耕土の除去のみであるため、浸透枡設置予定位置にて発掘調査を実施した。調査に及び、最初の掘削を行った浸透桝設置箇所で、土層の状況から不透水層であることが判明し、設計変更の必要が生じたため、事業者の判断により浸透桝設置箇所を追加し、合計で４箇所、64m^{2}が調査対象となった。

発掘調査では、４箇所の浸透桝設置位置をそれぞれ第43図のとおりＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区と設定し、それぞれ記録を行った。なお、前述のとおりＡ区の土層が不透水層であったため、浸透桝は設置されず、実際の工事で浸透桝が設置されたのはＢ区、Ｃ区、Ｄ区の３箇所３基である。遺構面が確認されるまで建設用重機により土を除去し、以深は人力で検出した。遺物の取り上げは調査区ごとに行い、遺構内出土遺物については遺構ごとに行った。記録写真は現場作業、整理作業共にデジタルカメラを使用した。

整理作業は、現場終了後に屋内で行い、土器の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成、写真撮影及び報告書作成を行った。

4　層序

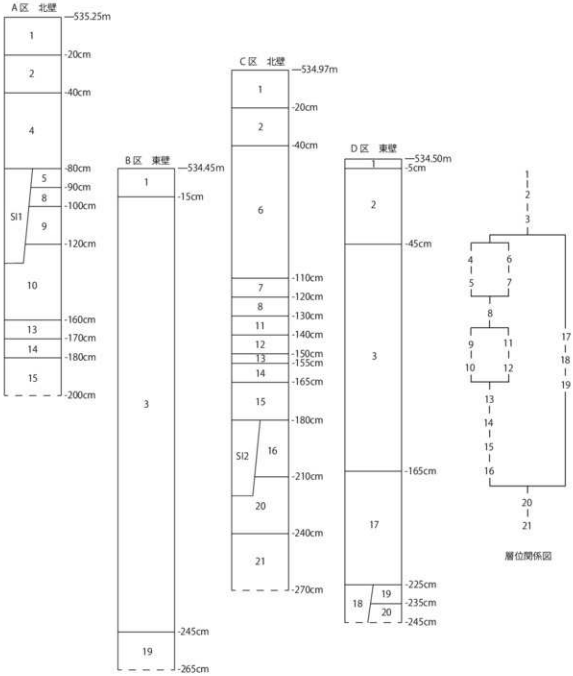
今回の調査での土層の詳細と新旧関係は、第44図に示す通りである。調査地は水田であり、調査を開始した年である平成28年（2016）の秋まで耕作されていた。また、調査地東側にはわさび田が広がっており、調査地はわさび田開墾時の土砂を人為的に積み上げた地形の上に立地していると予想された。実際、Ｂ区とＤ区では厚い造成土が確認された。第１層、第２層は耕作土であり、第３層は開墾時の造成土であった。第４層以下が自然堆積層である。

Ａ区は、シルトが主体となっており、第５層、第８層、第９層を掘り込む遺構を検出し、SI１とした。また、第14層、第15層は酸化鉄を含み、弥生土器片を包含している。

Ｂ区は、地表下およそ250cm 付近まで耕作土及び造成土で、自然堆積層は第19層のみである。

Ｃ区は、耕作土下面から第15層までシルトと砂礫層の互層であった。Ａ区と同じく第14層、第15層は酸化鉄を含み、弥生土器片を包含している。第16層、第20層を掘り込む遺構を検出し、SI２とした。

Ｄ区は、地表下およそ170cm まで耕作土及び造成土で、自然堆積層は第17層以深である。第19層、第20層を掘り込む第18層を確認し、砂礫を主体とする層相と掘り込み状況から自然流路であると判断した。



1. 水田耕作土
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
   酸化鉄粒を全体に含む
   径 5cm 程度の礫を少量含む
3. 造成土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
   炭化物を少量含む
5. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
   酸化鉄粒を少量含む
   上面で SI1 を検出
6. 10YR3/1 黒褐色砂礫、しまり弱、粘性弱
   径 5cm 程度の礫を含む
   6 層中で下層ほど礫が小さい
   河床礫層
7. 10YR3/3 暗褐色シルト質砂、しまり弱、粘性弱
   6 層の河床礫に伴う砂層
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
   径 1cm 以上の礫を含まない
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
   8 層に似るが 8 層より砂っぽい
10. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、しまり弱、粘性弱
    砂っぽい
    径 1cm 以上の礫を含まない
11. 10YR3/1 黒褐色砂、しまり弱、粘性弱
    径 1～3mm 程度の砂粒が主体
12. 10YR3/1 黒褐色砂、しまり弱、粘性弱
    11 層より砂粒が小さい
13. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト、しまり強、粘性強
    礫を ほとんど含まない
    炭化物を少量含む
14. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト、しまり強、粘性強
    骨片土器片、炭化物を少量含む
    全体に酸化鉄粒を含む
15. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト、しまり強、粘性強
    骨片土器片、炭化物を少量含む
    酸化鉄粒を含むが 14 層よりは少ない
16. 10YR5/3 暗褐色粘土質シルト、しまり強、粘性強
    10YR4/2 灰黄褐色土粒を全体に含む
    炭化物を含み、遺物を含まない
    上面で SI2 を検出
17. 10YR2/2 黒褐色砂礫、しまり弱、粘性弱
    径 5～10cm 程度の亜円礫主体
    河床礫層
18. 10YR2/2 黒褐色砂礫、しまり弱、粘性弱
    17 層にくらべ礫が小さい
    径 1～3cm 程度の亜円礫を含む
    19,20 層を切る
19. 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト、しまり強、粘性強
    遺物を含まない
    径 5cm 程度の礫を含む
    酸化鉄を全体に少量含む
20. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト、しまり強、粘性強
    16 層に似るが 20 層は径 5cm 程度の礫を含む
21. 10YR5/2 灰黄褐色砂礫、しまり弱、粘性弱
    径 1～3cm 程度の礫を含む

第44図　等々力町巾上巾下遺跡土層概念図

５　遺構

等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査では、Ａ区では竪穴状遺構１基とピット１基を、Ｃ区では竪穴建物跡１棟とピット１基を検出し精査した。調査区が狭小であるため、遺構の全容は不明である。

⑴　SI１

Ａ区第５層上面で検出された竪穴状遺構である。Ａ区は、調査地で最も南に位置する。北壁をＰ１に切られる。平面形は、東側が調査区外となり全容は不明であるが、方形と考えられる。西壁の方向はN13°Ｗである。遺構の規模は、南北およそ２ｍであり、東西は調査区外であるため不明であるが、調査区内で1.3ｍを測る。炭化物をやや多く含み、遺構外のシルト質土層と区別できる砂質の土層の覆土の広がりを遺構の範囲とした。掘り込みはおよそ40～50cmであり、立ち上がりは南壁面においてはほぼ垂直で、西壁面ではややなだらかとなっている。焼土は検出されなかった。遺構内から、内耳土器破片など５点が出土している。

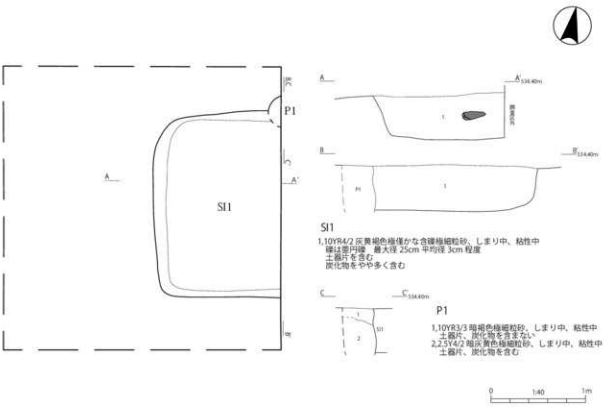
⑵　Ｐ１

Ａ区のＰ１は、SI１の覆土及び床面を切っており、深さは不明である。ピットの土層は２層に区分でき、第１層は遺物、炭化物を含まず、遺構検出面からおよそ50cm以深の第２層では、遺物片、炭化物を含む。

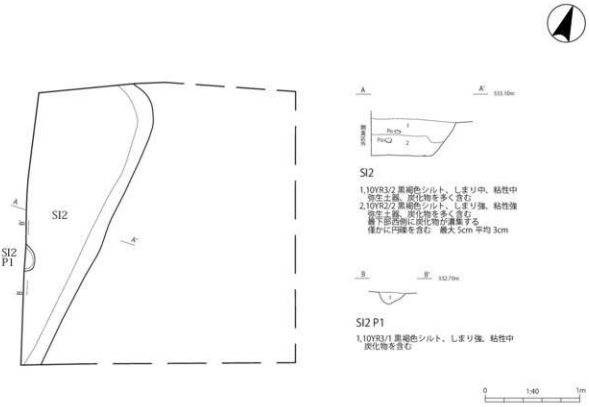
⑶　SI２

Ｃ区第16層上面で検出された竪穴建物跡である。Ｃ区は、調査区の西側に位置し、Ａ～Ｄ区の中で段丘崖から最も離れている。遺構の規模は、南北・東西ともに調査区外となるため不明であるが、調査区内では南北2.8ｍを測る。周囲の土層より黒色で区別できる土層の範囲を遺構とした。平面形は、遺構の一辺のみの検出のため不明であるが、北東角の形から方形と考えられる。東壁の方向はＮ７°Ｅである。深さはおよそ50cmで、東壁面でやや緩やかに立ち上がる。覆土は２層に分層でき、いずれも弥生土器、炭化物を多量に含む。弥生土器は覆土中に散在し、まとまった出土はしていない。調査区内東側、SI２Ｐ１のやや北の位置での床面で採取可能な炭化物が出土したため、樹種同定及び放射性炭素年代の測定を行った。焼土は検出していない。

SI２Ｐ１は、SI２の床面で検出した。炭化物を含むが、遺物は検出していない。SI２床面からの深さはおよそ10cmである。



第45図　A 区 SI 1



第46図　C 区 SI 2

6　遺物

等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査において、Ａ区では、SI１に伴う中世の土器・陶器類と遺構外からの弥生土器、Ｃ区では、SI２及び遺構外から弥生土器が出土した。弥生土器は破片のみで器形全体がわかる資料はないが、製作技法の特徴から、Ａ区、Ｃ区ともに弥生時代後期に比定できる。以下、区ごとに記載する。

⑴　Ａ区出土遺物

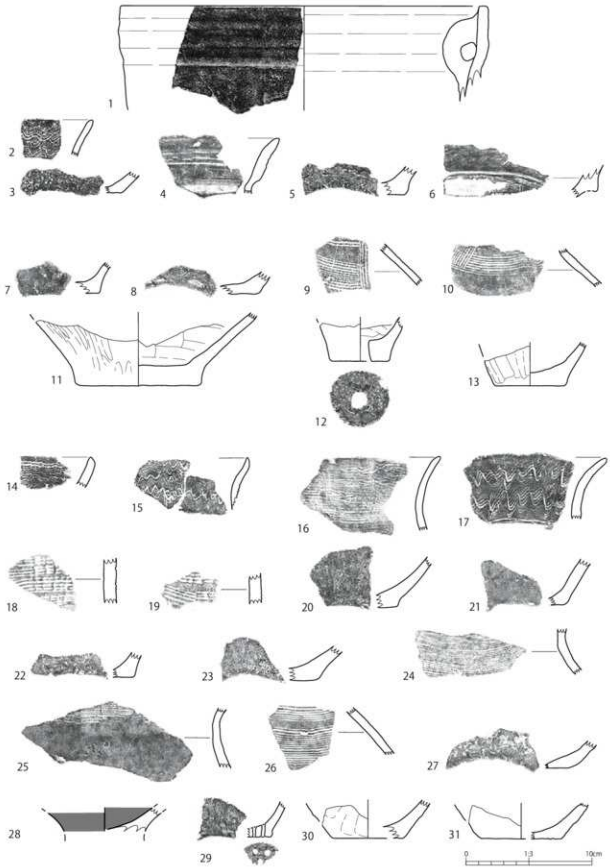
Ａ区 SI１からは中世の土器・陶器類が出土し、このうち１点を図示した（第47図１）。１は、内耳土器の鍋で、胎土には砂粒を多く含み、外面には炭化物が付着する。調整はロクロナデで、口縁部は肥厚せず直立気味に立ち上がる。

Ａ区遺構外出土遺物は、弥生土器５点を図示した（第47図２～６）。２は、甕の口縁部破片で、端部付近まで櫛描き波状文を施す。施文方向は、右から左の順となっている。３は、体部下半から底部の破片で、体部外面の無文部分が赤彩されることから壺と判断した。４は、体部下半に明瞭な稜をもち、有段口縁高坏になる可能性がある。５は、無文の底部破片である。底径及び調整から甕と判断した。６は、有段口縁甕の口縁部である。４、６の２点は、胎土が緻密で丁寧にナデ調整されている点が特徴的で、他の土器と区別でき北陸系と考えられる。

⑵　Ｃ区出土遺物

Ｃ区 SI２出土土器は、弥生土器７点を図示した（第47図７～13）。７、８は、無文の底部破片である。底径及び調整から甕と判断した。９、10は、壺の体部上半文様帯破片である。いずれも、櫛歯状工具で２段以上の横帯文様を施したのち、同原体で縦方向に区切る。原体は、幅１cm・５条と幅1.5cm・８条である。11は、体部下半と底部しか残存していないが、底径及び体部下半の開き具合、内面調整から壺と判断した。12は、単孔の甑で、底部外面の孔径はおよそ1.3cm である。内面と孔内には、灰色の付着物を観察できる。13は、器種不明であるが、体部下半の外面に縦方向のナデを確認できる。

Ｃ区遺構外出土土器は、弥生土器18点を図示した（第47図14～31）。14～23は甕である。14～17は、口縁部破片で、いずれも端部付近まで櫛描波状文を施す。施文方向は、上から下の順となっている。15は、やや受け口状の口縁形態をとる。18～19は、多段の簾状文を施す頸部破片である。20～23は、底部破片で、内外面ともにナデ調整されている。24～27は壺で、24、25、27は赤彩されている。また、24、26は、櫛歯状工具で施文した横帯文様間に空隙を配する多段帯状施文系土器である。28は、赤彩のある高坏で、形状は椀形を呈する。29は、多孔の甑で、残存している底部で孔径およそ４mm の孔を６箇所確認できる。穿孔は、外面から内面に向かっている。30、31は、底部破片で、器種は不明である。



１：Ａ区 SI１、２～６：Ａ区遺構外、７～13：Ｃ区 SI２、14～31：Ｃ区遺構外
第47図　等々力町巾上巾下遺跡出土土器

第９表　等々力町巾上巾下遺跡出土土器観察表

No.	調査区	出土位置	種別	器種	残存部位	口径(cm)	頸部径(cm)	最大径(cm)	最大径部位	底径(cm)	器高(cm)	技法の特徴 外面	技法の特徴 内面	技法の特徴 底部	備考
1	A区	SI 1	土師質土器	内耳鍋	口縁～体部上半	(29.0)	—	不明	不明	不明	(8.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	
2	A区	第14層検出	弥生土器	甕	口縁部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明	
3	A区	第14層検出	弥生土器	壺	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	赤彩
4	A区	第14層検出	弥生土器	高坏	口縁部～体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	
5	A区	第15層検出	弥生土器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	
6	A区	排土	弥生土器	甕	口縁部～頸部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	有段口縁甕
7	C区	SI 2	弥生土器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	
8	C区	SI 2	弥生土器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	
9	C区	SI 2	弥生土器	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明	11と同一個体か
10	C区	SI 2	弥生土器	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明	10と同一個体か
11	C区	SI 2	弥生土器	壺	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	9.1	(5.8)	ナデ	ナデ	ナデ	
12	C区	SI 2	弥生土器	甑	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	4.4	(3.5)	ナデ	ナデ	ナデ	
13	C区	SI 2	弥生土器	不明	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	5.4	(2.5)	ナデ	ナデ	ナデ	
14	C区	検出	弥生土器	甕	口縁部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明	
15	C区	検出	弥生土器	甕	口縁部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ミガキ	不明	
16	C区	検出	弥生土器	甕	口縁部～体部上半	16.4	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ミガキ	不明	
17	C区	検出	弥生土器	甕	口縁部～体部上半	12.4	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明	
18	C区	検出	弥生土器	甕	頸部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明	
19	C区	検出	弥生土器	甕	頸部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明	
20	C区	検出	弥生土器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	
21	C区	検出	弥生土器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	
22	C区	検出	弥生土器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	
23	C区	検出	弥生土器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	ナデ	
24	C区	検出	弥生土器	壺	頸部～体部上半	不明	11.0	不明	不明	不明	不明	櫛描文＋ミガキ	ナデ	不明	赤彩
25	C区	検出	弥生土器	壺	頸部～体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	櫛描文＋ミガキ	ナデ	不明	赤彩
26	C区	検出	弥生土器	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ＋櫛描文	ナデ	不明	
27	C区	検出	弥生土器	壺	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	オサエ	ナデ	赤彩
28	C区	検出	弥生土器	高坏	体部下半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	赤彩
29	C区	検出	弥生土器	甑	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	(2.6)	(2.8)	ナデ	ナデ	ナデ	
30	C区	検出	弥生土器	不明	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	(5.6)	(3.1)	ナデ	ナデ	不明	
31	C区	検出	弥生土器	不明	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	(6.4)	不明	ナデ	ナデ	ナデ	

7　自然科学分析

⑴　等々力町巾上巾下遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ
黒沼保子

１．はじめに

安曇野市穂高に所在する等々力町巾上巾下遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている。

２．試料と方法

試料は、Ｃ区の竪穴建物跡の覆土から出土した炭化材（No.1）である。竪穴建物跡の時期は、共伴土器から弥生時代後期と推測されており、年代測定結果でも整合的な結果が示された。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数及び残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径１cm の真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

３．結果

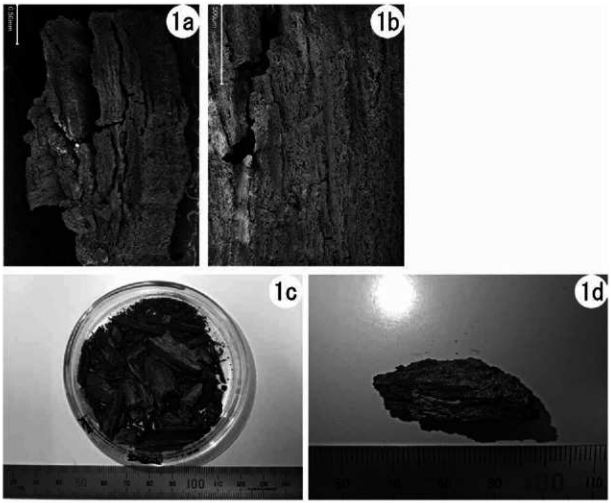
樹種同定の結果、試料は広葉樹の樹皮であった。試料内には３cm 角程度の破片が多数見られたが、いずれも同じ分類群と思われる。樹皮は、サクラ属など一部の種を除いて識別が困難である。同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

（１）樹皮　Bark　第48図　１a-１b（No.1）

師細胞及び師部放射組織からなる二次細胞及び周皮で構成される樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

４．考察

竪穴建物跡から出土した炭化材の破片類は広葉樹の樹皮で、樹種の特定には至らなかった。土器とともに覆土から出土しているが、用途は不明である。



1a-1d. 広葉樹樹皮（No. 1）

a：横断面、b：接線断面、c-d：試料写真

第48図　等々力町巾上巾下遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真と試料写真

⑵　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・黒沼保子

１．はじめに

安曇野市の等々力町巾上巾下遺跡から採取された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

等々力町巾上巾下遺跡の試料は、C 区の弥生時代後期の竪穴建物跡から出土した炭化材（PLD-34955）である。

測定試料の情報、調製データは第10表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・

ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第10表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34955	遺跡名：等々力町巾上巾下遺跡 調査区：C 区 遺構：竪穴建物跡 試料 No.1	種類：炭化材（広葉樹樹皮） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）

３．結果

第11表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C 年代、第49図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第11表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ±１σ）	^{14}C 年代（yrBP ±１σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-34955 等々力町巾上巾下遺跡	−27.37±0.11	1881±20	1880±20	82-133 cal AD (68.2%)	71-214 cal AD (95.4%)

４．考察

各試料の暦年較正結果のうち２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、試料ごとに結果を整理する。なお、縄文時代と弥生時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林（2009）を参照した。

等々力町巾上巾下遺跡のＣ区の竪穴建物跡から出土した炭化材（PLD-34955）は、71-214 cal AD（95.4%）の暦年代を示した。これは弥生時代後期の暦年代に相当し、調査所見とも整合的である。木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。等々力町巾上巾下遺跡の炭化材（PLD-34955）は広葉樹の樹皮であるため、測定結果は枯死もしくは伐採された年代に近い年代を示していると考えられる。

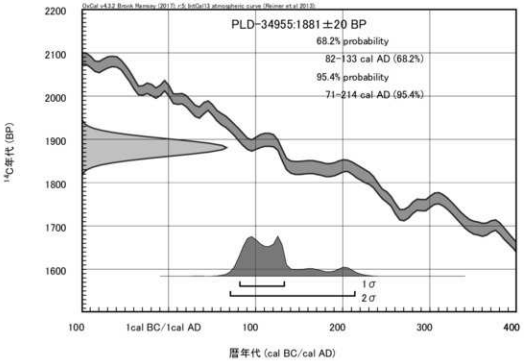
引用・参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（１）, 337-360.

小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：55-82，雄山閣.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0 -50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（4）, 1869-1887.



第49図　暦年較正結果

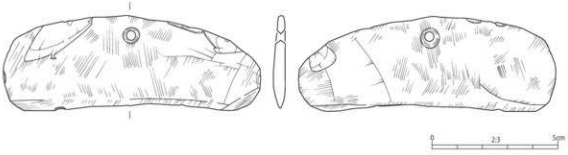
8　調査の総括

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴建物跡１棟、中世の竪穴状遺構１基が確認された。調査面積が狭小であるため遺構の範囲、分布密度は不明であった。今回、Ｃ区において弥生時代後期に比定される土器が出土し、共伴した炭化物の放射性炭素年代測定により整合的な結果が得られた。安曇野市内で弥生時代の遺構は発見例が少なく、特筆すべき成果である。

(1)　等々力町巾上巾下遺跡の出土遺物

今回の調査で、Ｃ区において甑２点が出土した。『穂高町誌』によると、調査地付近でサイロを建設した際に地下１ｍ以下で遺物が出土し、頁岩製の石包丁が含まれていた（第50図）（穂高町誌編纂委員会1991）。甑、石包丁の存在はいずれも稲の栽培を示唆する。また、烏川扇状地扇央に所在する弥生時代中期前半の芝宮南遺跡では、底部に布目痕のある土器が出土している（安曇野市教委2016）。従って今回の調査結果により、弥生時代後期には穂高地域で稲作及び食用米を蒸すという技術がすでに存在していたと推察できる。

Ａ区では、中世の内耳鍋の破片が出土したが、残存部位は口縁～体部上半であり、年代の比定ができなかったため、遺構形成時期は不明である。調査地一帯では、中世以降に牛流山真龍院（ごりゅうさんしんりゅういん）が所在したことが知られている。『穂高町誌』によると、牛流山真龍院は、元禄11年（1698）の『保高組邑々寺社御改帳』に記載があり、開基不明とある（穂高町誌編纂委員会1991）。今回確認された遺構、遺物が牛流山真龍寺と関わっている可能性はあるが、関係を示す事項は確認できなかった。



第50図　等々力町巾上巾下遺跡既出石包丁　（穂高町誌編纂委員会1991掲載資料を再実測）

(2)　立地と分布

等々力町巾上巾下遺跡は、烏川扇状地末端の段丘上に位置し、段丘崖を介して低湿地帯と隣接している。烏川扇状地の扇央～扇端で弥生時代の明確な遺構が発見されている例は、馬場街道遺跡と三枚橋遺跡のみであり、遺物が発見されている例は、芝宮南遺跡、八ツ口遺跡、穂高神社境内遺跡、柏原（かしわばら）遺跡などが挙げられる。

芝宮南遺跡は扇央に、穂高神社境内遺跡、八ツ口遺跡、柏原遺跡は扇端に位置する。扇状地扇央の水に乏しい土地では、扇状地内の自然流を利用した「縦堰（たてせき）」と呼ばれる水路によって水利を得てきた（穂

高町教委2001a)。対して、馬場街道遺跡の東側は、湧水のある低湿地帯となっており、段丘崖末端に所在する等々力町巾上巾下遺跡と似た立地である。

穂高地域に隣接した安曇野市明科地域では、みどりヶ丘遺跡やこや城遺跡などから石包丁が出土している。みどりヶ丘遺跡は犀川に、こや城遺跡は会田川に隣接した段丘上に立地しており、『明科町史』では河川の沖積地を利用し水稲農耕を行ったと推測している（明科町史編纂会1984)。

等々力町巾上巾下遺跡、馬場街道遺跡は水の豊富な土地に接するという点では明科地域のみどりヶ丘遺跡、こや城遺跡と共通し、等々力町巾上巾下遺跡では石包丁の出土記録もある（穂高町誌編纂委員会1991)。しかし、第２次発掘調査では水稲農耕を裏付けるような耕作地に関する遺構を確認できなかった。今後、低湿地帯側を含んだ周辺地域における遺物の出土と耕作地の発見が期待される。

(3) 遺跡の範囲

等々力町巾上巾下遺跡は、低湿地帯の上位に位置する段丘面の遺跡として認識されている。今回の調査におけるＢ区及びＤ区では、造成土とみられる土層が１ｍ以上の厚さで確認された。この造成土は低湿地帯でのわさび田等開削時に搬出され、積み上げられた土砂の可能性がある。従って、段丘上でも調査地東側の低湿地にごく近い場所、少なくとも今回の発掘においてはＢ区、Ｄ区に遺構は分布していない可能性が高い。

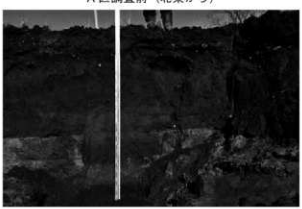
調査地で最も南に位置するＡ区周辺では、個人によるサイロ建設の際に地表下１ｍ以深から石包丁、管玉、弥生時代後期の土器、土師器、須恵器、灰釉陶器が採集されている（南安曇郡誌改訂編纂会1968、穂高町史編纂委員会1991)。

一方、平成13年（2001）に調査地の南およそ100mにおいて実施した第１次発掘調査では、深度230cm付近から奈良時代の遺構が検出されたが、今回の第２次発掘調査で明らかとなった弥生時代及び中世の遺構・遺物は確認されていない（未報告)。第１次発掘調査の結果を踏まえると、調査地の南側では、中世の遺跡は連続しないか失われてしまった可能性があり、弥生時代の遺跡の連続性は不明である。

調査地の北西～西側は、扇状地へつながる平地となっている。すなわち、等々力町巾上巾下遺跡の範囲は、低湿地帯と接する調査地から北西～西へ広がる可能性があるが、現在では国道が南北に走り市街地化されていて詳細は不明である。今回の調査では遺構が確認されたものの、面積狭小のため遺跡の規模・範囲を推定することはできなかった。今後の発掘調査により時代ごとの遺構分布が判明することを期待する。

A 区調査前（北東から）

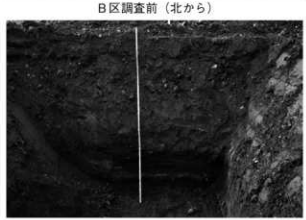
A区（南から）



A区北壁土層

B区調査前（北から）

B 区（北から）

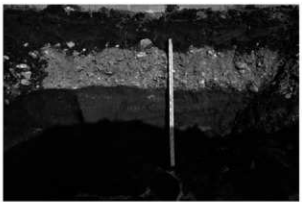


B区西壁土層

C区調査前（北から）

C区（北から）

写真13　等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査１



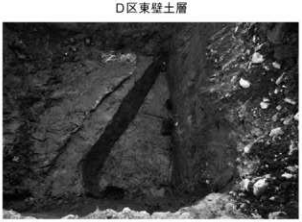
C区北壁土層

D区調査前（北から）

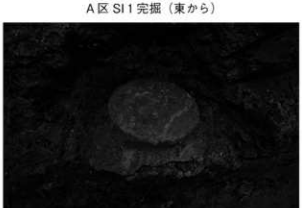
D区（南から）

D区東壁土層

A区 SI 1 完掘（東から）



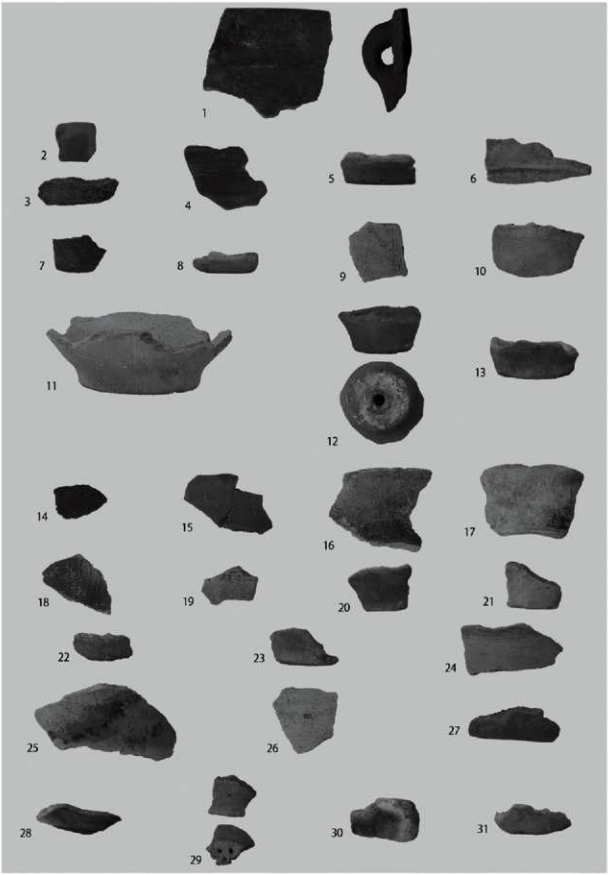
C区 SI 2 完掘（北から）



C区 SI 2 遺物出土状況

調査区俯瞰（北が上）

写真14　等々力町巾上巾下遺跡第２次発掘調査２



１：Ａ区 SI１、２～６：Ａ区遺構外、７～13：Ｃ区 SI２、14～31：Ｃ区遺構外
写真15　等々力町巾上巾下遺跡出土土器

引用・参考文献（五十音順）

明科町史編纂会　1984 『明科町史　上巻』明科町史刊行会

明科町教育委員会　2004 『上手屋敷遺跡第２次調査―町営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書―』明科町の埋蔵文化財第12集　明科町教育委員会

明科町教育委員会　2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ―町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書―』明科町の埋蔵文化財第13集　明科町教育委員会

安曇野市教育委員会　2009 『三枚橋・藤塚遺跡―安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』安曇野市の埋蔵文化財第２集　安曇野市教育委員会

安曇野市教育委員会　2010 『平成20年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書―八ツ口遺跡・三枚橋遺跡―』安曇野市の埋蔵文化財第３集　安曇野市教育委員会

安曇野市教育委員会　2013 『平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書―明科遺跡群古殿屋敷（第１次）・明科遺跡群栄町遺跡（第３次）―』安曇野市の埋蔵文化財第６集　安曇野市教育委員会

安曇野市教育委員会　2014 『平成24年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書―明科遺跡群栄町遺跡（第４次）―』安曇野市の埋蔵文化財第７集　安曇野市教育委員会

安曇野市教育委員会　2016 『芝宮南遺跡―穂高南小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』安曇野市の埋蔵文化財第10集　安曇野市教育委員会

安曇野市教育委員会　2018 『穂高神社境内遺跡１―新穂高支所建設事業に伴う第１次発掘調査報告書―』安曇野市の埋蔵文化財第14集　安曇野市教育委員会

太田喜幸・河西清光　1966 『長野県東筑摩郡明科町緑ヶ丘遺跡調査』『松本深訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』長野県考古学会研究報告書１　pp.139-156　長野県考古学会

豊科町教育委員会　1992 『吉野町館跡遺跡―県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』　豊科町教育委員会

豊科町教育委員会　1993 『梶海渡遺跡―県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』豊科町教育委員会

豊科町教育委員会　1994 『鳥羽遺跡―県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』豊科町教育委員会

豊科町教育委員会　1999 『町田遺跡―都市対策砂防事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』　豊科町教育委員会

長野県文化財保護協会復刻　1974 『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告　第四巻』　長野県文化財保護協会

長野県埋蔵文化財センター　1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10　―松本市内　その７・豊科町内―南中遺跡　北中遺跡　北方遺跡　上手木戸遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書10　長野県教育委員会

穂高町誌編纂委員会　1991 『穂高町誌第二巻（歴史編上・民俗編）』　穂高町誌刊行会

穂高町教育委員会　1987 『矢原遺跡群（馬場街道遺跡）―県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告―』　穂高町教育委員会

穂高町教育委員会　2001a 『穂高町　一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡　穂高沢水系による開発沢、上原古墳―担い手育成基盤整備事業穂高西部地区に伴う発掘調査報告書―』　穂高町教育委員会

穂高町教育委員会　2001b 『穂高町他谷遺跡―県営中山間総合整備事業あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書―』　穂高町教育委員会

堀金村教育委員会　1988 『神沢遺跡・田多井古城下遺跡・そり表遺跡』堀金村の埋蔵文化財第１集　堀金村教育委員会

三郷村教育委員会　1988 『黒沢川右岸遺跡』三郷村の埋蔵文化財第１集　三郷村教育委員会

南安曇郡誌改訂編纂会　1968 『南安曇郡誌　第二巻上』南安曇郡誌改訂編纂会

宮坂武男　2013 『縄張図・断面図・鳥瞰図で見る信濃の山城と館７　安曇・木曽編』戎光祥出版

調査報告書抄録

ふりがな	へいせい28ねんどあづみのしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	平成28年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第15集
編著者名	横山幸子、土屋和章、山下泰永、株式会社パレオ・ラボ
編集機関	安曇野市教育委員会
所在地	〒399-8281　長野県安曇野市豊科6000番地　　TEL0263-71-2000
発行年月日	西暦2018年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m^2	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
安曇野市内 所在遺跡	長野県安曇野市	20220	—	—	—	20160401 ～ 20170331	—	—
宮脇遺跡 （第１次）	長野県安曇野市 穂高6616番外	20220	2-34	36° 20′ 07″	137° 53′ 01″	20160715 ～ 20160715	9 m^2	宅地造成
等々力町中上 中下遺跡 （第２次）	長野県安曇野市 穂高4576番外	20220	2-35	36° 20′ 34″	137° 53′ 16″	20161226 ～ 20170118	64m^2	駐車場 造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
潮遺跡群 潮神明宮前遺跡	集落跡	古代	竪穴建物跡（平安時代）	土師器、黒色土器	発掘調査が必要。
大坪沢遺跡	集落跡	平安	なし	土師器	明確な遺構は確認できず。
藤塚遺跡	集落跡	古墳、平安	遺構覆土	土師器	明確な遺構は確認できず。
藤塚遺跡	集落跡	古墳、平安	なし	弥生土器、土師器	付近に遺構が存在する可能性が高い。
潮遺跡群 浦田遺跡	散布地	古代～近世	なし	土器小破片	遺構、時代のわかる遺物なし。
草深遺跡	集落跡	縄文	なし	縄文土器、黒曜石	地表に遺物が散在。
明科遺跡群 上郷遺跡	散布地	縄文、古墳～平安	なし	縄文土器、須恵器	明確な遺構は確認できず。
明科遺跡群 栄町遺跡	集落跡	古墳～平安	竪穴建物跡（古墳時代）２棟	土師器	遺構が良好に残存。
上手屋敷遺跡	集落跡	縄文、古墳～近世	なし	縄文土器、須恵器、石器	付近に遺構が存在する可能性が高い。
狐城	城館跡	中世～近世	なし	なし	地形の現状記録のみ。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
追堀遺跡	集落跡	平安	なし	須恵器	付近に遺構が存在する可能性が高い。
宮脇遺跡	集落跡	弥生、平安、中世	なし	なし	遺構・遺物の確認なし。
押野城	城館跡	中世～近世	主郭、堀切等	石器	地形の現状記録。付近に遺構が存在する可能性が高い。
等々力町巾上巾下遺跡	集落跡	縄文、弥生、奈良、平安、中世	竪穴状遺構２基	弥生土器 陶器類	地下80cm 以深で遺構が良好に残存。

要　約

平成28年度に長野県安曇野市内で実施した埋蔵文化財保護措置を掲載した。発掘調査等の総数は190件で、189件を安曇野市教育委員会が主体となって実施した。このうち試掘、遺物・遺構を確認した工事立会、現状記録措置、測量調査の成果を記載した。

宮脇遺跡は、島川扇状地上に立地し、弥生時代・平安時代・中世の遺跡と考えられてきた。これまでに本発掘調査は実施されていない。宅地造成に際し、浸透桝１基の設置箇所にて第１次宮脇遺跡発掘調査を実施した。調査面積は狭小であり遺構は確認できず、遺物は流入と見られる土器小破片（時期不明）が１点出土したのみである。

等々力町巾上巾下遺跡は、島川扇状地と低湿地帯の中間に位置し、縄文時代・弥生時代・平安時代の遺跡とされてきた。駐車場造成に先立ち、浸透桝設置のための掘削計４箇所にて第２次発掘調査を実施し、地下80cm で中世の竪穴状遺構を、地下180cm で弥生時代の竪穴建物跡を検出した。また、遺物では内耳土器の鍋を含む中世の土器・陶器類と、弥生土器が出土した。

安曇野市の埋蔵文化財第15集

平成28年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書

発行　平成30年（2018）３月30日
安曇野市教育委員会
〒399-8281　長野県安曇野市豊科6000番地
電話0263-71-2000
編集　安曇野市教育委員会
印刷　電算印刷株式会社